

## **Oracle® Database**

Companion CD インストール・ガイド

10g リリース 1 (10.1.0.2.0) for Microsoft Windows

**部品番号 : B13744-02**

2004 年 10 月

Oracle Database Companion CD インストール・ガイド, 10g リリース 1 (10.1.0.2.0)  
for Microsoft Windows

部品番号 : B13744-02

原本名 : Oracle Database Companion CD Installation Guide, 10g Release 1 (10.1.0.2.0) for Windows

原本部品番号 : B13693-02

原著者 : Patricia Huey

原協力者 : Sanket Atal, Warren Briese, James Emmonds, Joel Kallman, Pushkar Kapasi, Michael Hichwa, Joel Kallman, Pushkar Kapasi, Sergio Leunissen, Steve Mayer, Matthew McKerley, Alex Keh, Santhana Natarajan, Kristopher Rice, Janelle Simmons, Jason Straub, Martin Widjaja

Copyright © 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

---

---

# 目次

はじめに .....	v
対象読者 .....	vi
このマニュアルの構成 .....	vi
関連ドキュメント .....	vii
表記規則 .....	viii
<b>1 Oracle Database Companion CD インストールの概要</b>	
インストール・プロセスの概要 .....	1-2
「Oracle Database 10g Products」 インストール・タイプでインストールされる製品 .....	1-2
Oracle Database Examples .....	1-3
必須製品 .....	1-3
JPublisher .....	1-3
Legato Single Server Version .....	1-4
ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ .....	1-5
Oracle Text のナレッジ・ベース .....	1-5
「Oracle Database 10g Companion Products」 インストール・タイプでインストールされる製品 .....	1-6
Oracle HTTP Server .....	1-6
このリリースと他の Oracle HTTP Server リリースとの相違 .....	1-7
Oracle HTTP Server のインストール先 .....	1-7
Oracle HTML DB .....	1-8
Oracle HTML DB のインストール先 .....	1-8
<b>2 Oracle Database Companion CD の要件</b>	
ハードウェアおよびソフトウェア要件 .....	2-2
Windows Telnet サービスのサポート .....	2-2

Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート .....	2-3
Windows XP のサポート .....	2-3
<b>Oracle Database 10g Products の要件 .....</b>	<b>2-3</b>
Oracle Database 要件 .....	2-4
Oracle Database 10g Oracle ホーム・ディレクトリ .....	2-4
必要なディスク領域 .....	2-4
<b>Oracle Database 10g Companion Products の要件 .....</b>	<b>2-5</b>
Oracle HTTP Server の要件 .....	2-5
Oracle Database 要件 .....	2-5
ハードウェア要件 .....	2-6
オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件 .....	2-6
Oracle HTML DB の要件 .....	2-7
Oracle Database 要件 .....	2-7
必要なディスク領域 .....	2-7
Oracle HTTP Server の要件 .....	2-7
Oracle XML DB の要件 .....	2-8
<b>ネットワーク関連 .....</b>	<b>2-8</b>
DHCP コンピュータでのインストール .....	2-8
マルチホーム・コンピュータでのインストール .....	2-9
複数の別名を持つコンピュータでのインストール .....	2-10
ループバック・アダプタのインストール .....	2-10
ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかの確認 .....	2-11
Windows NT でのループバック・アダプタのインストール .....	2-12
Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール .....	2-15
Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール .....	2-19
Windows NT からのループバック・アダプタの削除 .....	2-21
Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からのループバック・アダプタの 削除 .....	2-21

### 3 Oracle Database Companion CD のソフトウェアのインストール

<b>Companion CD 製品のインストール前の考慮事項 .....</b>	<b>3-2</b>
複数の Oracle Database Companion CD のインストールの実行 .....	3-2
Companion CD の製品のインストール・ロードマップ .....	3-2
<b>インストールするソフトウェアへのアクセス .....</b>	<b>3-3</b>
CD-ROM または DVD からハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブから インストール .....	3-3

リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール .....	3-4
リモート・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有 .....	3-4
ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを割当て .....	3-5
リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータでのインストール .....	3-6
ハード・ドライブからのインストール .....	3-6
リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール .....	3-7
<b>Oracle Database 10g Products のインストール .....</b>	<b>3-7</b>
<b>新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール .....</b>	<b>3-9</b>
<b>既存の Oracle HTTP Server ホームへの Oracle HTML DB のインストール .....</b>	<b>3-12</b>
<b>Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除 .....</b>	<b>3-15</b>
Oracle Database Products および Oracle Database Companion Products の削除 .....	3-15
データベースからの Oracle HTML DB の削除 .....	3-16

## 4 Oracle Database Companion CD のインストール後のタスク

<b>Oracle HTTP Server のインストール後のタスク .....</b>	<b>4-2</b>
ファイルのバックアップ .....	4-2
以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行 .....	4-2
以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行 .....	4-3
httpd.conf ファイルのコピーと編集 .....	4-3
一括変更の実行 .....	4-3
LoadModule のディレクティブ・リストの変更 .....	4-4
サポートされない機能に関するディレクティブとセクションの削除 .....	4-4
ポート番号の変更 .....	4-5
既存のセクションとディレクティブの変更 .....	4-6
新規のセクションとディレクティブの追加 .....	4-7
サーバー証明書と秘密鍵の移行 .....	4-7
Secure Sockets Layer セクションとディレクティブの変更 .....	4-9
新規ディレクトリへの必須ファイルのコピーまたは移動 .....	4-10
mod_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行 .....	4-11
<b>Oracle HTTP Server インストールの検証 .....</b>	<b>4-12</b>
Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化 .....	4-12
Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動 .....	4-12
<b>Oracle HTML DB のインストール後のタスク .....</b>	<b>4-13</b>
Oracle HTTP Server の起動または再起動 .....	4-13
Oracle HTML DB インストールの検証 .....	4-13
Oracle9i Database での Oracle HTTP Server 用の Oracle HTML DB の構成 .....	4-14

Oracle Database 10g の images ディレクトリから Oracle9i の images ディレクトリへの コピー .....	4-14
Oracle9i httpd.conf ファイルの変更 .....	4-15
Oracle9i wdbsvr.app ファイルの変更 .....	4-15
Oracle HTTP Server の停止と再起動 .....	4-16
10g ホームの Oracle HTTP Server の削除 .....	4-16

## A Oracle Database Companion CD の高度なインストール項目

非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール .....	A-2
レスポンス・ファイルを使用した非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール .....	A-3
サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ .....	A-3
新規レスポンス・ファイルの作成 .....	A-4
Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定 .....	A-5
レスポンス・ファイルのコピーおよび変更 .....	A-6
Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定 .....	A-6
異なる言語で Oracle コンポーネントをインストールおよび使用 .....	A-7
異なる言語で Oracle Universal Installer を実行 .....	A-7
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用 .....	A-8

## B Oracle Database Companion CD のトラブルシューティング

インストール・セッションのログの確認 .....	B-2
インストール失敗後のクリーン・アップ .....	B-2
HTML DB イメージ・ディレクトリの別名 .....	B-3

## 索引

---

---

# はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database Companion CD for Microsoft Windows に収録されている製品のインストールおよび設定方法について説明します。

次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

## 対象読者

『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド』は、Oracle Database Companion CD に収録されている次の製品のインストールを行うユーザーを対象としています。

- Oracle Database Examples
- JPublisher
- Legato Single Server Version
- ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ
- Oracle Text のナレッジ・ベース
- プラットフォーム固有のドキュメント
- Oracle HTTP Server
- Oracle HTML DB

このマニュアルを使用するにあたっては、Oracle Database がインストールされているコンピュータに対する管理者権限と、オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概要に関する知識が必要です。

## このマニュアルの構成

このマニュアルの内容は次のとおりです。

### 第 1 章「Oracle Database Companion CD インストールの概要」

Oracle Database Companion CD からインストールできる製品の概要と、各製品のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

### 第 2 章「Oracle Database Companion CD の要件」

Oracle Database Companion CD に収録されている製品をインストールする際の要件について説明します。

### 第 3 章「Oracle Database Companion CD のソフトウェアのインストール」

Oracle Universal Installer を起動して Oracle Database Companion CD に収録されている製品をインストールする方法について説明します。

### 第 4 章「Oracle Database Companion CD のインストール後のタスク」

ソフトウェアのインストール後に完了する必要があるタスクについて説明します。

## 付録 A 「Oracle Database Companion CD の高度なインストール項目」

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD 製品のインストール方法について説明します。この付録では、Oracle Universal Installer の実行方法および異なる言語での Oracle コンポーネントの使用方法についても説明します。

## 付録 B 「Oracle Database Companion CD のトラブルシューティング」

インストール時の問題のトラブルシューティング情報を掲載します。

# 関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Database リリース・ノート』
- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Database Client インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Database 概要』

Oracle のエラー・メッセージについては、『Oracle Database エラー・メッセージ』を参照してください。Oracle のエラー・メッセージの説明は、HTML 形式でのみ提供されています。インターネットに接続している場合は、Oracle オンライン・ドキュメントの Oracle メッセージ検索機能を使用して、目的のエラー・メッセージを検索できます。

このマニュアル内の多くの例では、Oracle のインストール時にデフォルトでインストールされるシード・データベースのサンプル・スキーマを使用しています。これらのスキーマの作成方法およびその使用方法の詳細は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

# 表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 本文の表記規則
- コード例の表記規則
- Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

## 本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 <b>索引構成表</b> が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	<p>固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。</p> <p><b>注意:</b> プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルで指定します。</p> <p>/disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。</p> <p>hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーとして接続します。</p> <p>JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。</p>
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	<p><i>parallel_clause</i> を指定できます。</p> <p><i>old_release</i>.SQL を実行します。ここで、<i>old_release</i> とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。</p>

## コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL\*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[ ]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL ( <i>digits</i> [ , <i>precision</i> ])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE   DISABLE}

規則	意味	例
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの一つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE   DISABLE} [COMPRESS   NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。</li> <li>■ コードの一部を繰り返すことができる。</li> </ul>	CREATE TABLE ... AS subquery;  SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大 / 小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。  <b>注意：</b> プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr  CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

## Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 ( ) およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	<code>c:¥winnt"¥"system32</code> は <code>C:¥WINNT¥SYSTEM32</code> と同じです。
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。	<code>C:¥oracle¥oradata&gt;</code>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	<code>C:¥&gt;exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal&lt;1600¥"</code> <code>C:¥&gt;imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)</code>
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	<code>C:¥&gt; net start OracleHOME_NAME_TNSListener</code>

規則	意味	例
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	<p>Oracle8i より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。ORACLE_HOME ディレクトリの名前は、Windows NT の場合はデフォルトでは C:\orant です。</p> <p>このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:\oracle\product\10.1.0 です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに最新リリースの Oracle をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:\oracle\product\10.1.0\db_n に設定されます。n は最新の Oracle ホーム番号です。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。</p> <p>このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。</p>	%ORACLE_HOME%\rdbms\admin ディレクトリへ移動します。

---

---

# Oracle Database Companion CD インストールの概要

この章では、Oracle Database Companion CD からインストールできる製品の概要と、各製品のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

次の項目について説明します。

- インストール・プロセスの概要
- 「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされる製品
- 「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプでインストールされる製品

## インストール・プロセスの概要

インストール・プロセスは、次の4段階で構成されます。

1. **インストールの計画**: この章では、インストール可能な2つのインストール・タイプの製品と、ソフトウェアのインストール前に理解しておく必要のある情報について説明します。インストール・タイプは「Oracle Database 10g Products」と「Oracle Database 10g Companion Products」です。
2. **システム要件の確認**: 第2章「[Oracle Database Companion CD の要件](#)」では、ソフトウェアをインストールする前にシステムで満たす必要がある最低要件について説明します。
3. **ソフトウェアのインストール**: 次の項を参照して、Oracle Database Companion CD の製品をインストールします。
  - [第3章「Oracle Database Companion CD のソフトウェアのインストール](#)」では、Oracle Universal Installer を使用したソフトウェアのインストール方法について説明します。
  - [付録 A](#) では、高度なインストール項目の非対話型（サイレント）インストールの実行、および異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用について説明します。
  - [付録 B](#) では、インストールのトラブルシューティングに関する情報を示します。
4. **インストール後のタスク**: 第4章「[Oracle Database Companion CD のインストール後のタスク](#)」では、インストール後に推奨されるタスクおよび必要なタスクについて説明します。

## 「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされる製品

次の項では、「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプを選択した場合にインストールされる製品について説明します。これらの製品は既存の Oracle Database リリース 1 (10.1) の Oracle ホームにインストールしてください。

- [Oracle Database Examples](#)
- [JPublisher](#)
- [Legato Single Server Version](#)
- [ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ](#)
- [Oracle Text のナレッジ・ベース](#)

## Oracle Database Examples

Oracle Database Examples には、Oracle Database の製品、オプションおよび機能の習得に使用できる多様な例と製品デモが含まれています。これらの例の多くは、Oracle Database にオプションでインストールできるサンプル・スキーマと連動するように設計されています。Oracle Documentation Library にあるドキュメントの多くは、Oracle Database Examples で提供されるサンプル・プログラムおよびスクリプトを使用しています。

### 必須製品

Oracle Database Examples を使用するためには、Oracle Database にサンプル・スキーマをインストールする必要があります。データベースの作成時にサンプル・スキーマを組み込むかどうかは、Oracle Database をインストールするとき、または Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して新規データベースを作成するときを選択できます。また、サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールすることもできます。

**関連資料：**また、サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールする方法は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

## JPublisher

JPublisher は Java ユーティリティであり、Java プログラム内で次のユーザー定義データベース・エンティティを表す Java クラスを生成します。

- SQL オブジェクト型
- オブジェクト参照型 (REF 型)
- SQL コレクション型 (VARRAY 型または NESTED TABLE 型)
- PL/SQL パッケージ
- サーバー・サイド Java クラス
- SQL 問合せおよび DML 文

JPublisher を使用すると、SQL オブジェクト型、オブジェクト参照型およびコレクション型 (VARRAY または NESTED TABLE) から Java クラスへのマッピングを強い型指定で指定し、カスタマイズできます。

また、JPublisher で PL/SQL パッケージ用のクラスも生成できます。これらのクラスは、PL/SQL パッケージ内でストアド・プロシージャを起動するためのラッパー・メソッドを持ちます。

さらに、JPublisher により Java から PL/SQL のみの型へのアクセスが単純化されます。PL/SQL の型と SQL の型の間で事前定義済マッピングまたはユーザー定義マッピングを使用したり、これらの型の間で PL/SQL 変換ファンクションを使用できます。これらの型が適

切に対応していれば、JPublisher では必要な Java および PL/SQL コードが自動的に生成されます。

SQL または PL/SQL エンティティを Java に公開するのと同じ方法で、サーバー・サイド Java クラスをクライアント・サイド Java クラスに公開できます。これにより、アプリケーションからデータベースの Java クラスを直接コールできます。

JPublisher を使用すると、生成された Java クラスを Web サービスとして公開できます。たとえば、SQL または PL/SQL エンティティやサーバー・サイド Java エンティティを公開できます。

JPublisher は、生成されるほとんどの Java クラスで SQLJ コードを使用するため、Oracle SQLJ Translator および Oracle SQLJ Runtime が組み込まれています。Oracle SQLJ は、Java プログラムに SQL 文を埋め込むための標準的な方法です。

### **Oracle SQLJ Translator**

JPublisher は生成されるクラスで SQLJ コードを使用するため、必要に応じて、コードの生成プロセスで Oracle SQLJ Translator を自動的に起動します。Oracle SQLJ Translator は、埋込み SQL 文を JDBC コールに変換します。

### **Oracle SQLJ Runtime**

Oracle SQLJ Runtime はプログラムの実行中に使用され、JPublisher によって生成されたほとんどのクラスを実行します。SQLJ Runtime は、JDBC ドライバ上で動作する、Pure Java コードのシン・レイヤーです。SQLJ Runtime は、SQL 操作に関する情報を読み取り、JDBC ドライバに指示を伝達する中間プログラムとして機能します。

**関連資料：**『Oracle Database JPublisher ユーザーズ・ガイド』

## **Legato Single Server Version**

Legato Single Server Version (LSSV) は、Legato Systems 社が開発したバックアップおよびリカバリ・アプリケーションで、Oracle 製品向けの Legato NetWorker および Legato NetWorker Module のサブセットです。LSSV を使用すると、単一サーバー上でのみ Oracle データをバックアップおよびリストアできます。ファイル・システム、Automatic Storage Manager ディスク・グループまたは RAW デバイスに格納されている Oracle データのオンライン・バックアップまたはオフライン・バックアップを実行できます。

LSSV ソフトウェアには、メディア管理レイヤーが含まれています。Oracle Recovery Manager (RMAN) では、データベースのバックアップおよびリストアにテープ記憶域を使用するときに、このレイヤーが必要になります。LSSV はバックアップ・スケジュールを管理し、Oracle Recovery Manager (RMAN) と通信して、Oracle データをテープにコピーします。

Legato Single Server Version は、Oracle データ記憶域を管理するために Oracle Database とともに機能するので、Legato Single Server Version は Oracle Database と同じシステムにインストールする必要があります。Legato Single Server Version および Oracle Database ソフ

トウェア・コンポーネントは、Oracle Database データに記憶域管理ソリューションを提供します。

Legato Single Server Version 管理プログラムには、Legato Single Server Version 構成を管理するための Graphical User Interface があります。管理プログラムは、Oracle Server システムに Legato Single Server Version をインストールするときにインストールされます。

Legato Single Server Version を完全にインストールして構成するには、次のタスクを完了する必要があります。

1. Legato Storage Manager または Legato Networker がインストールされている場合は削除します。
2. 必要なソフトウェアおよびハードウェアが使用可能であることを確認します。
3. Legato Single Server Version を Oracle Database と同じ Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。
4. インストール後の作業を完了します。

**関連資料：**『Legato Single Server Version Installation Guide』、または Legato 社の次の Web サイトから入手可能なドキュメントを参照してください。

<http://www.legato.com/LSSV>

## ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでは、JAccelerator および Oracle *interMedia* Image Accelerator がインストールされます。これには、Oracle JVM および Oracle *interMedia* 用のネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP) が含まれています。プラットフォーム上でこの 2 つの製品のパフォーマンスを改善するには、これらのライブラリが必要です。

## Oracle Text のナレッジ・ベース

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでは、2 つの Oracle Text ナレッジ・ベース (英語とフランス語) がインストールされます。提供されるナレッジ・ベースは、要件に応じて拡張できます。あるいは、英語とフランス語以外の言語で自分自身のナレッジ・ベースを作成できます。

**関連資料：**ナレッジ・ベースの作成および拡張の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。

## 「Oracle Database 10g Companion Products」 インストール・タイプでインストールされる製品

次の項では、「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプを選択した場合にインストールできる製品について説明します。

- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle HTML DB](#)

### Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、Apache HTTP Server バージョン 1.3.28 をベースとする Web サーバーです。Oracle HTTP Server を新規の Oracle ホームにインストールするには、「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプを使用します。このスタンドアロン版の Oracle HTTP Server には、次の機能が用意されています。

- Web ページの提供に使用できる堅牢で信頼性の高い Web サーバー
- `mod_perl` および `mod_fastcgi` を使用した Perl および Fast CGI スクリプトのサポート
- `mod_plsql` を使用した PL/SQL アプリケーションのサポート
- Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) の使用による高可用性  
OPMN は Oracle HTTP Server プロセスを監視し、障害の発生時に再起動します。
- Secure Sockets Layer (SSL) を使用したセキュアなトランザクションのサポート
- `mod_ossso` を使用したシングル・サインオン機能

シングル・サインオン機能を有効にするには、Oracle HTTP Server を Oracle Internet Directory および Single Sign-On Server とともに使用する必要があります。どちらも Oracle Application Server 10g に含まれます。

- オラクル社が提供するモジュール以外にも多数の標準 Apache モジュール

**関連資料：** Oracle Internet Directory および Single Sign-On Server の詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

## このリリースと他の Oracle HTTP Server リリースとの相違

スタンドアロン版の Oracle HTTP Server は、他のリリースの Oracle ソフトウェアに付属するバージョンと、次の点が異なります。

- Oracle9i リリース 2 以下および Oracle9iAS リリース 1 との相違
  - このリリースの Oracle HTTP Server には Apache JServ は含まれず、またサポートもされません。Apache JServ がサポートされないため、デフォルト構成では mod\_oprocmgr モジュールはロードされません。
  - このリリースでは、オラクルの開発による mod\_oss1 が mod\_ssl に置き換えられます。
  - apachectl ユーティリティは、Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動について、サポートされなくなりました。Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動には Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) を使用する必要があります。

### 関連項目：

- SSL 証明書を mod\_oss1 に必要な書式に移行する方法の詳細は、4-7 ページの「[サーバー証明書と秘密鍵の移行](#)」を参照してください。
  - Oracle Process Manager and Notification サーバーの使用方法の詳細は、4-12 ページの「[Oracle HTTP Server インストールの検証](#)」を参照してください。
- Oracle9iAS リリース 2 以上との相違
    - Oracle9iAS または Oracle Application Server 10g クラスタには、スタンドアロン版の Oracle HTTP Server は構成できません。  
このため、このリリースの Oracle HTTP Server に関連したプロセスの起動、停止または再起動には、dcmctl ユーティリティを使用できません。
    - このリリースの Oracle HTTP Server の管理には、Oracle Enterprise Manager の Application Server Control を使用できません。

## Oracle HTTP Server のインストール先

Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。別々の Oracle ホーム・ディレクトリを使用していれば、同じシステムに複数の Oracle HTTP Server をインストールできます。

## Oracle HTML DB

Oracle HTML DB は、プログラマでなくてもデータベース集中型の Web アプリケーションを作成できるようにする、管理された開発環境です。開発者にとっては、デスクトップ・データベースの生産性と Oracle データベースのセキュリティ、信頼性およびパフォーマンスが得られます。どのような IT 企業でも、Oracle 開発スキルを持った社員がいない部門向けに Oracle HTML DB 環境を管理できます。

### Oracle HTML DB のインストール先

Oracle HTML DB を実行するためには、Oracle HTTP Server にアクセス可能である必要があります。Oracle HTML DB は、Oracle HTTP Server と一緒に新しい Oracle ホーム・ディレクトリにインストールできます。または、`mod_plsql` が組み込まれた Oracle HTTP Server を含む、Oracle HTTP Server の既存の Oracle ホームにこの製品をインストールすることもできます。次の製品の Oracle ホーム・ディレクトリは、この要件を満たしています。

- Oracle HTTP Server 10g
- Oracle Identity Management 10g (Oracle Application Server 10g の一部)

---

---

## Oracle Database Companion CD の要件

この章では、Oracle Database 10g Products および Oracle Database 10g Companion Products のインストールに必要な要件について説明します。

次の項目について説明します。

- [ハードウェアおよびソフトウェア要件](#)
- [Oracle Database 10g Products の要件](#)
- [Oracle Database 10g Companion Products の要件](#)
- [ネットワーク関連](#)

## ハードウェアおよびソフトウェア要件

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが認定されている場合があるため、オラクル製品 主なシステム要件 で、認定されているハードウェア・プラットフォームとオペレーティング・システムのバージョンの最新リストを確認してください。オラクル製品 主なシステム要件 は、次の URL でアクセスできます。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

後述の各項では、次の要件の情報を示します。

- [Windows Telnet サービスのサポート](#)
- [Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート](#)
- [Windows XP のサポート](#)

### Windows Telnet サービスのサポート

Windows XP、Windows 2000 および Windows Server 2003 には Telnet サービスが含まれており、これによってリモート・ユーザーは、オペレーティング・システムにログオンし、コマンドラインを使用してコンソール・プログラムを実行できます。Oracle では、この機能を使用するコマンドライン・ユーティリティの使用をサポートしていませんが、Oracle Universal Installer、Database Configuration Assistant および Oracle Net Configuration Assistant などのデータベース GUI ツールはサポートしていません。

---

---

**注意：**「サービス」コントロール パネルで Telnet サービスが開始されていることを確認します。

---

---

## Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート

Oracle では、Windows ターミナル サービスのコンソールを使用した Windows 2000 Server、Windows XP Professional および Windows Server 2003 での Oracle HTML DB と Oracle HTTP Sever のインストール、構成および実行をサポートします。ただし、かわりにターミナル サービスのクライアントを使用すると、Windows Server 2003 でしかこれらの操作は行えません。この方法で Oracle HTTP Server または Oracle HTML DB をインストールしようとする、多くの構成ツールが応答を停止します。すべての構成ツールをターミナル サービスのコンソールから起動し (mstsc/console を使用)、ターミナル サービスのクライアントからは起動しないでください。

### 関連資料：

- Terminal Server の詳細は、Microsoft の Web サイトを参照してください。  
<http://www.microsoft.com/>
- 最新の Terminal Server に関連したシステム要件は、日本オラクル社のホームページを参照してください。  
<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

## Windows XP のサポート

Legato NetWorker は、Windows XP でサポートされます。

## Oracle Database 10g Products の要件

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプの実行要件は次のとおりです。

- [Oracle Database 要件](#)
- [Oracle Database 10g Oracle ホーム・ディレクトリ](#)
- [必要なディスク領域](#)

**関連項目：** 1-2 ページの「[「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

## Oracle Database 要件

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプをインストールするためには、システムが Oracle Database リリース 1 (10.1) にアクセスしている必要があります。

**関連資料:** 『Oracle Database インストレーション・ガイド』

## Oracle Database 10g Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle Database 10g Products は、既存の Oracle ホームにインストールする必要があります。Oracle Database 10g Products を既存の Oracle ホームにインストールする場合には、Oracle Database で使用している Oracle ホーム・ディレクトリを最初に指定する必要があります。Oracle ホーム・ディレクトリのパスが不明の場合には、Oracle Universal Installer で確認できます。

Oracle ホーム・ディレクトリのパスを確認するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME\_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 「ようこそ」画面で「インストール済の製品」をクリックします。  
「インベントリ」画面が表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。
3. 「インベントリ」画面の各 Oracle ホームを開き、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.2.0) を検索します。
4. 「閉じる」をクリックし、次に「取消」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
5. 第 3 章「Oracle Database Companion CD のソフトウェアのインストール」のインストール手順で使用できるよう、Oracle ホームの名前を控えておきます。

## 必要なディスク領域

Oracle ホーム・ディレクトリを含むファイル・システムに、インストールに必要なディスク領域があるかどうかを確認します。Windows システムの場合、Oracle Database Companion CD から製品をインストールするためには、システム・ドライブに 100MB、Oracle ホーム・ドライブに 530MB の空き領域がそれぞれ必要です。

## Oracle Database 10g Companion Products の要件

Oracle Database 10g Companion Products をインストールする場合、Oracle HTTP Server と Oracle HTML DB のどちらか、またはその両方をインストールできます。Companion Products は、Oracle Database 用に使用されている Oracle ホームとは別の Oracle ホームにインストールする必要があります。

次の項目について説明します。

- [Oracle HTTP Server の要件](#)
- [Oracle HTML DB の要件](#)

**関連項目：** 1-6 ページの「[「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

## Oracle HTTP Server の要件

新規の Oracle ホームに Oracle HTTP Server をインストールするためには、次の要件を満たしている必要があります。

- [Oracle Database 要件](#)
- [ハードウェア要件](#)
- [オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件](#)

### Oracle Database 要件

Oracle HTTP Server は、実行するために Oracle Database リリース 1 (10.1) または Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) にアクセスする必要があります。Oracle Database は、Oracle\*Net でアクセスできれば Oracle HTTP Server とは別のシステムに置くこともできます。ただし、Oracle HTTP Server はそれ自体のホームにある必要があります。

たとえば、Oracle Database が OraDB10g\_home1 にインストールされている場合、Oracle Universal Installer を実行して Oracle HTTP Server をインストールするとき、そのホームの Oracle Database を指定できますが、Oracle HTTP Server はそれ自体のホーム（たとえば、OraDB10g\_home2）にインストールする必要があります。

## ハードウェア要件

NTFS システムの場合、Oracle HTTP Server は次のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 物理 RAM: 256MB 以上、512MB 推奨
- 仮想メモリー: RAM の 2 倍
- 一時ディレクトリ: 100MB のディスク領域
- Companion CD の各製品に必要なディスク領域

インストールする製品	システム・ドライブの ディスク領域	Oracle ホームの ディスク領域
Oracle HTTP Server	80MB	162MB
Oracle HTTP Server および Oracle HTML DB	100MB	535MB

FAT 32 システムの場合は、これより多少高い設定にします。

## オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件

Oracle HTTP Server には、オペレーティング・システムおよび Service Pack に関する次の最小要件があります。

- Windows NT Server 4.0 Service Pack 6a 以上。  
Windows NT には、Windows NT Server 4.0、Windows NT Server 4.0 Enterprise Edition および Terminal Server Edition が含まれます。
- Windows 2000 Service Pack 3 以上。  
Windows 2000 には、Windows 2000 Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server、Windows 2000 Datacenter Server および Terminal Services が含まれます。
- Windows Server 2003。
- Windows XP Professional: Oracle HTTP Server に対してサポートされます。

## Oracle HTML DB の要件

Oracle HTML DB の要件は次のとおりです。

- [Oracle Database 要件](#)
- [必要なディスク領域](#)
- [Oracle HTTP Server の要件](#)
- [Oracle XML DB の要件](#)

### Oracle Database 要件

Oracle HTML DB には、Oracle Database リリース 1 (10.1) または Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) のいずれかが必要です。Oracle HTML DB は Oracle HTTP Server を含む Oracle ホームにインストールする必要があります。(Oracle HTML DB と Oracle HTTP Server の両方を含むこのホームは、Companion CD Oracle ホームと呼ばれます。) Companion CD Oracle ホームは、Oracle HTML DB が Oracle\*Net を使用してこのデータベースにアクセスできれば、Oracle Database ホームとは別の物理サーバーに置くこともできます。

たとえば、Oracle Database が OraDB10g\_home1 にインストールされている場合、Oracle Universal Installer を実行して Oracle HTML DB をインストールするとき、そのホームの Oracle Database を指定できますが、Oracle HTML DB は Oracle HTTP Server を含むそれ自体のホーム (たとえば、OraDB10g\_home2) にインストールする必要があります。

### 必要なディスク領域

インストール用に、Oracle ホーム・ディレクトリを含むファイル・システムに 460MB 以上の空きディスク領域があることを確認します。システム・ドライブに必要なディスク領域は 100MB です。

### Oracle HTTP Server の要件

Oracle HTML DB を実行するためには、Oracle HTTP Server にアクセス可能である必要があります。Oracle HTML DB を既存の Oracle ホームにインストールする場合、mod\_plsql が組み込まれた Oracle HTTP Server リリース 9.0.4 以上を含む Oracle ホーム・ディレクトリがシステム上にあるかどうかをチェックします。次の製品の Oracle ホーム・ディレクトリは、この要件を満たしています。

- Oracle HTTP Server 10g
- Oracle Identity Management 10g (Oracle Application Server 10g の一部)

これらの要件を満たしていないシステムには、Oracle Database 10g Companion Products をインストールする際に Oracle HTTP Server 10g をインストールする必要があります。

### Oracle XML DB の要件

使用する Oracle データベースには Oracle XML DB を先にインストールする必要があります。インストール時に作成された、あるいは Database Configuration Assistant (DBCA) により作成された事前構成済データベースを使用する場合、Oracle XML DB のインストールと構成はすでに完了しています。

**関連資料：** Oracle XML DB を手動で既存のデータベースに追加する方法の詳細は、『Oracle XML DB 開発者ガイド』を参照してください。

## ネットワーク関連

一般に、Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、このインストールをするためのローカル・ストレージ、表示モニター、CD-ROM または DVD-ROM ドライブが装備されています。

この項では、この一般的な条件を満たしていないコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする方法について説明します。次のような場合について説明します。

- DHCP コンピュータでのインストール
- マルチホーム・コンピュータでのインストール
- 複数の別名を持つコンピュータでのインストール
- ループバック・アダプタのインストール

### DHCP コンピュータでのインストール

Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) では、ネットワーク上で動的 IP アドレスが割り当てられます。動的アドレス指定により、コンピュータはネットワークに接続するたびに、異なる IP アドレスを取得できます。場合によっては、コンピュータの接続中に IP アドレスが変わる可能性もあります。DHCP システムでは、静的 IP アドレス指定と動的 IP アドレス指定を併用できます。

DHCP 設定では、ソフトウェアが IP アドレスを追跡するため、ネットワーク管理が簡単になります。その結果、ネットワークに新しいコンピュータを追加する場合、そのコンピュータに手動で一意の IP アドレスを割り当てる必要がありません。ただし、DHCP プロトコルを使用するコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする前に、そのコンピュータにローカル IP アドレスを割り当てるためのループバック・アダプタをインストールする必要があります。

**関連項目：**

- 2-11 ページの「ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかの確認」
- 2-19 ページの「Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール」

## マルチホーム・コンピュータでのインストール

Oracle Database Companion CD 製品を複数のネットワーク・カードを持つコンピュータにインストールする場合、Oracle Universal Installer は `etc/hosts` ファイル内の最初の名前を使用します。希望するホスト名が最初になるようこのファイル内の行を並べ替える必要がある場合があります。インストール後にファイルを元の状態に戻すことができます。

マルチホーム・コンピュータは、複数の IP アドレスに関連付けられます。これは通常、コンピュータ上に複数のネットワーク・カードがあることにより実現されます。各 IP アドレスは 1 つのホスト名に関連付けられ、さらにそのホスト名に別名を設定できます。

マルチホーム・コンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする場合、Oracle Universal Installer により、プライマリ・ネットワーク・アダプタ上のホスト名および IP アドレスが使用されるように製品が構成されます。

クライアントは、このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用してコンピュータにアクセスすることが必要です。確認するには、短縮名（ホスト名のみ）およびフルネーム（ホスト名およびドメイン名）を使用して、クライアント・コンピュータからホスト名に対して ping を実行します。どちらも機能する必要があります。

`hostname` コマンドと `ipconfig` コマンドを実行することにより、プライマリ・ホスト名および IP アドレスを確認できます。次に例を示します。

```
prompt> hostname
test-pc2
```

```
prompt> ipconfig
```

Windows IP Configuration

Ethernet adapter ローカル エリア接続：

```
Connection-specific DNS Suffix . : us.mycompany.com
IP Address. . . . . : 139.185.140.166
Subnet Mask . . . . . : 255.255.255.0
Default Gateway . . . . . : 139.185.140.1
```

Ethernet adapter ワイヤレス ネットワーク接続：

```
Media State . . . . . : Media disconnected
```

プライマリ・アダプタが Oracle Database Companion CD 製品用に使用するものでない場合、製品用に使用するネットワーク・アダプタをプライマリ・ネットワーク・アダプタにする必要があります。

**関連項目:** Windows でのプライマリ・アダプタの確認方法については、2-10 ページの「[ループバック・アダプタのインストール](#)」を参照してください。

## 複数の別名を持つコンピュータでのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、単一の IP で、複数の別名によりネーミング・サービスに登録されます。ネーミング・サービスでは、これらの別名すべてを同一のコンピュータに解決します。

このようなコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする前に、次のことをする必要があります。

- コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。
- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタになるようにします。

ループバック・アダプタにより、Oracle Database Companion CD 製品がホスト名を問い合わせた場合に、問合せはローカルで実行されるので必ず同じ名前が取得されるようになります。ループバック・アダプタがないと、問合せはネーミング・サービスから応答を得るのでコンピュータの任意の別名を返す可能性があります。

**関連項目:** Windows でのプライマリ・アダプタの確認方法、およびループバック・アダプタのインストール方法については、2-10 ページの「[ループバック・アダプタのインストール](#)」を参照してください。

## ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタによりコンピュータにローカル IP が割り当てられます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールすると、コンピュータにはユーザーが所有するネットワーク・アダプタとループバック・アダプタの最低 2 つのネットワーク・アダプタが存在します。Oracle Database Companion CD 製品には、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用する Windows が必要です。

プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールする順番によって決まります。

- Windows NT では、プライマリ・アダプタは最初にインストールされたアダプタです。つまり、ループバック・アダプタをインストールし、ネットワーク・アダプタを削除して、ネットワーク・アダプタを再インストールする必要があります。
- Windows 2000、Windows Server 2003 および Windows XP では、プライマリ・アダプタは最後にインストールされたアダプタです。ループバック・アダプタをインストールした後に追加のネットワーク・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタを削除してから再インストールする必要があります。

DHCP コンピュータでインストールする場合、ループバック・アダプタが必要です。

**関連項目**：2-8 ページの「[DHCP コンピュータでのインストール](#)」

ループバック・アダプタをインストールする手順は、Oracle Database Companion CD 製品をインストールする Windows のバージョンによって異なります。

- [ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかの確認](#)
- [Windows NT でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [Windows NT からのループバック・アダプタの削除](#)
- [Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からのループバック・アダプタの削除](#)

**ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかの確認**

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかを確認するには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、ループバック・アダプタの値の一覧を示すセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter ローカル エリア接続 2:  
Connection-specific DNS Suffix . . :  
Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter  
Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50  
DHCP Enabled. . . . . : Yes  
Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes  
Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129  
Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

## Windows NT でのループバック・アダプタのインストール

Windows NT でのループバック・アダプタのインストールは、Windows NT が最初にインストールされたネットワーク・アダプタについて報告するので、他の Windows プラットフォームよりも複雑です。DHCP コンピュータはすでにネットワーク・アダプタを持っているので、ループバック・アダプタが最初にインストールされたネットワーク・アダプタになるよう、すでにあるネットワーク・アダプタを削除して後で再インストールする必要があります。次の各項で、この方法について説明します。

- 2-12 ページの「手順の概要」
- 2-12 ページの「要件」
- 2-13 ページの「詳細手順」

### 手順の概要

Windows NT でループバック・アダプタをインストールする手順の概要は、次のようになります。

1. コンピュータ上の既存のネットワーク・アダプタの情報を集めます。  
既存のネットワーク・アダプタを削除して再インストールする必要があるため、この手順を実行する必要があります。
2. ループバック・アダプタをインストールします。
3. 既存のネットワーク・アダプタを削除します。
4. ループバック・アダプタの構成を終了します。
5. コンピュータを再起動します。
6. ネットワーク・アダプタを再インストールします。
7. コンピュータを再起動します。

### 要件

Windows NT でループバック・アダプタをインストールするには、次のものがが必要です。

- Windows NT インストール用 CD-ROM。これによりループバック・アダプタをインストールできます。
- ネットワーク・アダプタを再インストールする際のネットワーク・アダプタのドライバ。

**詳細手順**

1. 再インストールできるように既存のネットワーク・アダプタの情報を集めます。一般的に、次の情報が必要になります。

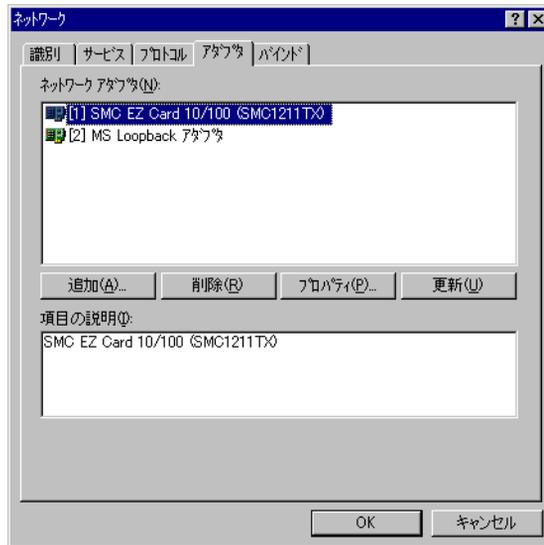
**表 2-1 既存のネットワーク・アダプタの情報**

項目	値の取得先
IP アドレス	「ネットワーク」コントロールパネルの「 <b>アダプタ</b> 」タブ。ネットワーク・アダプタを選択し、「 <b>プロパティ</b> 」をクリックします。
サブネット・マスク	「ネットワーク」コントロールパネルの「 <b>プロトコル</b> 」タブ。「 <b>TCP/IP</b> 」を選択し、「 <b>プロパティ</b> 」をクリックします。プロパティのダイアログで、「 <b>IP アドレス</b> 」タブを選択し、「 <b>詳細</b> 」をクリックします。
WINS サーバー・アドレス	「ネットワーク」コントロールパネルの「 <b>プロトコル</b> 」タブ。「 <b>TCP/IP</b> 」を選択し、「 <b>プロパティ</b> 」をクリックします。プロパティのダイアログで、「 <b>WINS アドレス</b> 」タブを選択します。
DNS サーバー・アドレス	「ネットワーク」コントロールパネルの「 <b>プロトコル</b> 」タブ。「 <b>TCP/IP</b> 」を選択し、「 <b>プロパティ</b> 」をクリックします。プロパティのダイアログで、「 <b>DNS</b> 」タブを選択します。

2. Windows NT インストール用 CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
3. デスクトップの「**ネットワーク コンピュータ**」を右クリックし、「**プロパティ**」を選択します。「ネットワーク」コントロールパネルが表示されます。
4. 「**アダプタ**」タブを選択します。
5. 「**追加**」をクリックします。
6. 「**MS Loopback Adapter**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
7. 「MS Loopback アダプタ カード セットアップ」ダイアログで、「**OK**」をクリックしてデフォルトのフレーム・タイプを受け入れます（デフォルト値は 802.3）。
8. Windows NT の CD-ROM の場所（たとえば、E:¥i386）を入力し、「**続行**」をクリックします。

ループバック・アダプタがインストールされると、Windows NT ですべてのネットワーク・アダプタが示された「ネットワーク」コントロールパネルが表示されます（[図 2-1](#)）。

図 2-1 ループバック・アダプタが表示された「ネットワーク」コントロールパネル



9. 「ネットワーク」コントロールパネルで、ループバック・アダプタの前にインストールしたネットワーク・アダプタを削除します。ネットワーク・アダプタを選択し、「削除」をクリックします。

ループバック・アダプタを最初のネットワーク・アダプタにするため、これを実行する必要があります。例では、SMC EZ Card を削除します。後で再インストールします。

10. 「ネットワーク」コントロールパネルで「閉じる」をクリックします。これにより、「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログが表示されます (図 2-2)。
11. 「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログで、「MS Loopback アダプタ」を選択し、次のようにします。
  - a. **IP アドレス** : ループバック・アダプタに対してルーティング不能 IP アドレスを入力します。次のルーティング不能アドレスを推奨します。
    - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)
    - 10.10.10.10
  - b. **サブネット マスク** : 255.255.255.0 を入力します。
  - c. その他のフィールドはすべて空のままにします。
  - d. 「OK」をクリックします。

図 2-2 ループバック・アダプタの値が表示された TCP/IP のプロパティのダイアログ



12. コンピュータを再起動します。
13. コンピュータが起動したら、実際のネットワーク・アダプタを再インストールします。
14. 再度コンピュータを再起動します。

## Windows 2000 でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2000 は、最後にインストールされたネットワーク・アダプタについて報告します。つまり、ループバック・アダプタをインストールした後に追加のネットワーク・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタを削除してから再インストールする必要があります。ループバック・アダプタは、コンピュータにインストールされた最後のネットワーク・アダプタである必要があります。

Windows 2000 でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「設定」、そして「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加と削除」をダブルクリックします。ハードウェアの追加と削除ウィザードが表示されます。
3. 開始のページで「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアに関する作業の選択」ページで、「デバイスの追加 / トラブルシューティング」を選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「ハードウェア デバイスの選択」 ページで、「**新しいデバイスの追加**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「新しいハードウェアの検索」 ページで、「**いいえ、一覧からハードウェアを選択しません**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
7. 「ハードウェアの種類」 ページで、「**ネットワーク アダプタ**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」 ページで、次のようにします。
  - a. **製造元** : 「**Microsoft**」を選択します。
  - b. **ネットワーク アダプタ** : 「**Microsoft Loopback Adapter**」を選択します。
  - c. 「**次へ**」をクリックします。
9. 「ハードウェアのインストールの開始」 ページで 「**次へ**」 をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加と削除ウィザードの完了」 ページで、「**完了**」をクリックします。
11. デスクトップの「**マイ ネットワーク**」を右クリックし、「**プロパティ**」を選択します。「**ネットワークとダイヤルアップ接続**」コントロールパネルが表示されます。
12. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常「**ローカル エリア接続 2**」という名前になっています。「**プロパティ**」を選択します。
13. 「**全般**」タブで、「**インターネット プロトコル (TCP/IP)**」を選択し、「**プロパティ**」をクリックします。
14. プロパティのダイアログ (図 2-3) で、次のようにします。
  - a. **IP アドレス** : ループバック・アダプタに対してルーティング不能 IP アドレスを入力します。次のルーティング不能アドレスを推奨します。
    - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)
    - 10.10.10.10
  - b. **サブネット マスク** : 255.255.255.0 を入力します。
  - c. その他のフィールドはすべて空のままにします。
  - d. 「**OK**」をクリックします。

図 2-3 ループバック・アダプタの値が表示された「インターネット プロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ



15. 「ローカル エリア接続 2 のプロパティ」ダイアログで「OK」をクリックします。
16. コンピュータを再起動します。
17. C:\windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルの localhost 行の後に次の形式で 1 行追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

それぞれの意味は次のとおりです。

- IP\_address は、手順 14 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
- hostname はコンピュータ名です。
- domainname はドメイン名です。

次に例を示します。

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

18. ネットワークの構成を確認します。
  - a. 「システム」コントロールパネルを開き、「ネットワーク ID」タブを選択します。  
「フル コンピュータ名」で、ホスト名およびドメイン名が表示されていることを確認します (図 2-4)。

図 2-4 「システム」コントロールパネルの「ネットワーク ID」タブ



- b. 「プロパティ」をクリックします。

「コンピュータ名」にはホスト名が、「フル コンピュータ名」にはホスト名およびドメイン名が表示されています (図 2-5)。

図 2-5 「識別の変更」ダイアログ



- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」には、ドメイン名が表示されています（図 2-6）。

図 2-6 「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」 ダイアログ



## Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2003 または Windows XP でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックし、ハードウェアの追加ウィザードを起動します。
3. 開始の画面で「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」画面で、「はい、ハードウェアを接続していません」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています。」画面で、「新しいハードウェア デバイスの追加」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」画面で、「一覧から選択したハードウェアをインストールする」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください。」画面から、「ネットワーク アダプタ」を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」画面で、次の選択を行います。
  - 製造元: 「Microsoft」を選択します。
  - ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
9. 「次へ」をクリックします。

10. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」画面で、「**次へ**」をクリックします。
11. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」画面で、「**完了**」をクリックします。
12. Windows 2003 を使用している場合は、コンピュータを再起動します。
13. デスクトップの「**マイ ネットワーク**」を右クリックし、「**プロパティ**」を選択します。「ネットワーク接続」コントロールパネルが表示されます。
14. 作成したばかりの接続を右クリックします。これは通常「ローカルエリア接続 2」という名前になっています。「**プロパティ**」を選択します。
15. 「**全般**」タブで、「**インターネット プロトコル (TCP/IP)**」を選択し、「**プロパティ**」をクリックします。
16. プロパティのダイアログで、次のようにします。
  - a. **IP アドレス** : ループバック・アダプタに対してルーティング不能 IP アドレスを入力します。次のルーティング不能アドレスを推奨します。
    - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)
    - 10.10.10.10
  - b. **サブネット マスク** : 255.255.255.0 を入力します。
  - c. その他のフィールドはすべて空のままにします。
  - d. 「**完了**」をクリックします。
17. 「**OK**」をクリックします。
18. 「ローカルエリア接続 2 のプロパティ」ダイアログで「**OK**」をクリックします。
19. コンピュータを再起動します。
20. C:\windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルの localhost 行の後に次の形式で 1 行追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

- *IP\_address* は、手順 16 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
- *hostname* はコンピュータ名です。
- *domainname* はドメイン名です。

次に例を示します。

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

21. ネットワークの構成を確認します。
  - a. 「システムのプロパティ」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フルコンピュータ名」で、ホスト名およびドメイン名が表示されていることを確認します。
  - b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にはホスト名が、「フルコンピュータ名」にはホスト名およびドメイン名が表示されています。
  - c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」には、ドメイン名が表示されています。

### Windows NT からのループバック・アダプタの削除

Windows NT からループバック・アダプタを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから、「設定」、そして「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ネットワーク」をダブルクリックします。
3. 「アダプタ」タブを選択します。
4. 「MS Loopback アダプタ」を選択し、「削除」をクリックします。
5. コンピュータを再起動します。

### Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からのループバック・アダプタの削除

Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からループバック・アダプタを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「システム」コントロールパネルを表示します。
  - Windows 2000: 「スタート」メニューから、「設定」、そして「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
  - Windows 2003: 「スタート」メニューから、「設定」、そして「コントロールパネル」、次に「システム」を選択します。
  - Windows XP: 「スタート」メニューから、「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
2. 「ハードウェア」タブで、「デバイス マネージャ」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を展開します。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「削除」を選択します。



---

## Oracle Database Companion CD の ソフトウェアのインストール

この章では、Oracle Universal Installer の起動方法と、Oracle Database Companion CD に収録されている製品のインストールおよび削除方法について説明します。また、Oracle HTTP Server の起動、停止または再起動の方法についても説明します。

次の項目について説明します。

- Companion CD 製品のインストール前の考慮事項
- インストールするソフトウェアへのアクセス
- Oracle Database 10g Products のインストール
- 新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール
- 既存の Oracle HTTP Server ホームへの Oracle HTML DB のインストール
- Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除

## Companion CD 製品のインストール前の考慮事項

インストールを開始する前に、[第 1 章「Oracle Database Companion CD インストールの概要」](#)の情報を確認し、[第 2 章「Oracle Database Companion CD の要件」](#)にリストされている作業を完了させてください。

次に、次の内容について検討します。

- [複数の Oracle Database Companion CD のインストールの実行](#)
- [Companion CD の製品のインストール・ロードマップ](#)

### 複数の Oracle Database Companion CD のインストールの実行

Oracle Database Companion CD 製品を複数インストールする必要がある場合、非対話型モードを使用することができます。非対話型モードの場合、各コンピュータでレスポンス・ファイルを使用してコマンドラインから Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルは、通常 Oracle Universal Installer の GUI ダイアログ・ボックスで入力する設定を含むテキスト・ファイルです。この方法により、各コンピュータに同じ設定を使用して簡単に複数のインストールを実行できます。

**関連項目：**非対話型でのインストールの実行の詳細は、[A-2 ページの「非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール」](#)を参照してください。

### Companion CD の製品のインストール・ロードマップ

この章で説明するソフトウェアは CD-ROM に含まれています。ソフトウェアのインストールまたは削除には、Oracle Universal Installer を使用します。このリリースのコンポーネントのインストールには、以前のリリースの Oracle Universal Installer を使用しないでください。

Oracle Database Companion CD には、次の 2 つのインストール・タイプが含まれます。

- Oracle Database 10g Products
- Oracle Database 10g Companion Products

「Oracle Database 10g Products」を選択すると、Oracle Universal Installer によってこのインストール・タイプに含まれるすべての製品がインストールされます。インストールする製品、および新規または既存の Oracle ホームのどちらにインストールするかを選択できます。Oracle Database Products をインストールする場合、既存の Oracle ホームにインストールする必要があります。Companion Products にインストールする場合、新規の Oracle ホームにインストールする必要があります。インストールまたは削除する製品に応じて、次の該当する項の指示に従ってください。

- [Oracle Database 10g Products のインストール](#)
- [既存の Oracle HTTP Server ホームへの Oracle HTML DB のインストール](#)

- 新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール
- Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除

**関連項目：**

- A-2 ページの「非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール」
- A-7 ページの「異なる言語で Oracle コンポーネントをインストールおよび使用」

## インストールするソフトウェアへのアクセス

次のいずれかの状況で Oracle Database Companion CD 製品をインストールする必要がある場合、インストール手順に進む前にこの項の手順に従ってください。

- CD-ROM または DVD からハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブからインストール
- リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール
- リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータでのインストール

## CD-ROM または DVD からハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブからインストール

Oracle Database Companion CD 製品の CD-ROM または DVD からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーし、そこからインストールすることができます。これは、ネットワークで Oracle Database Companion CD の多くの製品をインストールする場合、製品をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合、より簡単な方法です。

インストール・メディアの内容をハード・ディスクにコピーするには、次のようにします。

1. ハード・ドライブにディレクトリを作成します。次に例を示します。  
`d:¥install¥Disk1`
2. インストール・メディアの内容を作成したばかりのディレクトリにコピーします。
3. 必要なインストール・ファイルをすべてコピーしたら、Oracle Database Companion CD 製品をインストールできます。

## リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合、リモート CD-ROM または DVD ドライブからインストールを実行できます。次の点について確認してください。

- リモート・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有
- ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを割当て

### リモート・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有

使用するリモート CD-ROM または DVD ドライブで、共有アクセスが許可されている必要があります。これを設定するには、CD-ROM または DVD ドライブを持つリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモート・コンピュータに Administrator ユーザーとしてログインします。
2. Windows エクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD のドライブ文字を右クリックし、「共有」(Windows 2000、Windows NT) または「共有とセキュリティ」(Windows 2003、Windows XP) を選択します。
4. 「共有」タブをクリックし、次のようにします。
  - a. 「このフォルダを共有する」を選択します。
  - b. 「共有名」に cdrom または dvd などの共有名を入力します。ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD を割り当てる際にこの名前を使用します。次の手順の手順 1 の手順 d を参照してください。
  - c. 「アクセス許可」をクリックします。アクセスするユーザーに対して、Oracle Database をインストールするには最低限「読み取り」アクセス許可が必要です。
  - d. 終了する場合、「OK」をクリックします。
5. CD-ROM の場合、「Oracle Database 10g Companion CD Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD を CD-ROM ドライブに挿入します。  
DVD の場合、Oracle Database を DVD ドライブに挿入します。

## ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを割当て

リモート CD-ROM または DVD ドライブを割り当て、割り当てられたドライブから Oracle Universal Installer を実行するには、ローカル・コンピュータで次の手順を実行します。

1. リモート CD-ROM または DVD ドライブを割り当てます。
  - a. ローカル・コンピュータで Windows エクスプローラを起動します。
  - b. 「ツール」メニューから、「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択して「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログを表示します。
  - c. リモート CD-ROM または DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
  - d. 「フォルダ」に次の形式でリモート CD-ROM または DVD ドライブの場所を入力します。

¥¥remote\_hostname¥share\_name

それぞれの意味は次のとおりです。

- remote\_hostname は、CD-ROM または DVD ドライブを持つリモート・コンピュータの名前です。
- share\_name は、前の手順の手順 4 で入力した共有名です。次に例を示します。

¥¥computer2¥cdrom

- e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合、次のようにします。
    - **Windows NT:** 「ユーザー名」にユーザー名を入力します。
    - **Windows 2000:** 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
    - **Windows 2003 または Windows XP:** 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
  - f. 「OK」(Windows NT) または 「完了」(Windows 2000、Windows 2003、Windows XP) をクリックします。
2. 割り当てられた CD-ROM または DVD ドライブから Oracle Universal Installer を実行します。

## リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータでのインストール

Oracle Database Companion CD 製品をリモート・コンピュータでインストールおよび実行（つまり、リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、これらのコンポーネントを実行）するのに、コンピュータへの物理的なアクセスがない場合、VNC または Symantec pcAnywhere などのリモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータで実行されていればリモート・コンピュータでインストールを実行できます。ローカル・コンピュータでもリモート・アクセス・ソフトウェアが実行されている必要があります。

次の 2 つのいずれかの方法で Oracle Database Companion CD 製品をリモート・コンピュータでインストールできます。

- Oracle Database Companion CD 製品の内容を CD-ROM または DVD からハード・ドライブにコピーしている場合、ハード・ドライブからインストールできます。
- CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入し、CD-ROM または DVD からインストールできます。

### ハード・ドライブからのインストール

Oracle Database Companion CD 製品の内容を CD-ROM または DVD からハード・ドライブにコピーしている場合、ハード・ドライブからインストールできます。

次の手順を完了させる必要があります。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアをインストールし、リモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータで実行してください。
2. Oracle Database Companion CD 製品の CD-ROM または DVD の内容を含むハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有ハード・ドライブに割り当てます。リモート・コンピュータでこれを行うにはリモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用し、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有ハード・ドライブの Oracle Universal Installer にアクセスします。

## リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入し、CD-ROM または DVD からインストールできます。これは 3-4 ページの「[リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール](#)」で説明した状況と類似しています。

次の手順を完了させる必要があります。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアをインストールし、リモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータで実行してください。
2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有します。  
リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有 CD-ROM または DVD ドライブに割り当てます。リモート・コンピュータでこれを行うにはリモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。  
この手順は、3-7 ページの「[リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール](#)」に記載されています。
3. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用し、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有 CD-ROM または DVD ドライブの Oracle Universal Installer にアクセスします。

## Oracle Database 10g Products のインストール

Oracle Database 10g Products は、既存の Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の Oracle ホームにインストールしてください。

**関連項目：** 1-2 ページの「[「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

Oracle Database 10g Products をインストールするには、次のようにします。

1. Oracle のコンポーネントをインストールするコンピュータに、Administrators グループのメンバーとしてログオンします。  
プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
2. 環境変数 ORACLE\_HOME があれば、これを削除します。  
環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

---

**注意：** 環境変数 ORACLE\_HOME は自動的にレジストリに設定されます。この変数を手動で設定するとインストールが妨げられます。

---

3. 「Oracle Database 10g Companion CD Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD-ROM を挿入するか、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の DVD-ROM で companion ディレクトリに移動します。

ハード・ディスクからインストールする場合は、`setup.exe` をダブルクリックします。

インストール・メディアからインストールしている場合、Autorun 画面が自動的に表示されます。Autorun 画面が表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」メニューから、「ファイル名を指定して実行」を選択します。

- b. 次のように入力します。

```
DRIVE_LETTER:¥autorun¥autorun.exe
```

「ようこそ」画面が表示されます。

---

---

**注意：**追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。

---

---

4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
5. 「ファイルの場所の指定」画面で次の操作を実行します。
  - a. 「ソース」では、インストールする製品を表すファイルへのパスをデフォルトのままにします。
  - b. 「インストール先」では、Oracle Database の Oracle ホームが指定されていることを確認します。(デフォルトの Oracle ホームが設定されています。)

**関連項目：**正しい Oracle ホームの確認方法の詳細は、2-4 ページの「[Oracle Database 10g Oracle ホーム・ディレクトリ](#)」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックします。
7. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Products」を選択して「次へ」をクリックします。
8. 「サマリー」画面で、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。
9. インストールを完了後、「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
10. インストール・プロセス中に作成された一時ファイルが必要なければ、`temp¥OraInstalldate_time` ディレクトリを削除することもできます。`OraInstalldate_time` ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。  
コンピュータを再起動した場合も、`OraInstalldate_time` ディレクトリが削除されます。

## 新規の Oracle ホームへの Oracle Database 10g Companion Products のインストール

「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプには、次の製品が含まれます。

- Oracle HTTP Server
- Oracle HTML DB

Oracle Database 10g Companion Products は、Oracle Database ホームとは別の Oracle ホームにインストールします。Oracle HTTP Server は新規の Oracle ホームにインストールし、Oracle HTML DB はこの Oracle HTTP Server の Oracle ホームにインストールする必要があります。これは既存の Oracle HTTP Server の Oracle ホームでも構いません。または、どちらか（あるいは両方）の製品をインストールする際に Oracle HTTP Server をインストールするよう選択することもできます。

**関連項目：** 1-6 ページの「[「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプでインストールされる製品](#)」

Oracle Database 10g Companion Products を新規の Oracle ホームにインストールするには、次のようにします。

1. Oracle のコンポーネントをインストールするコンピュータに、Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

2. 環境変数 ORACLE\_HOME があれば、これを削除します。

環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

---

**注意：** 環境変数 ORACLE\_HOME は自動的にレジストリに設定されます。この変数を手動で設定するとインストールが妨げられます。

---

3. 「Oracle Database 10g Companion CD Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD-ROM を挿入するか、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の DVD-ROM で companion ディレクトリに移動します。

ハード・ディスクからインストールする場合は、setup.exe をダブルクリックします。

インストール・メディアからインストールしている場合、Autorun 画面が自動的に表示されます。Autorun 画面が表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」メニューから、「ファイル名を指定して実行」を選択します。

- b. 次のように入力します。

`DRIVE_LETTER:¥autorun¥autorun.exe`

「ようこそ」画面が表示されます。

---

**注意：**追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。

---

4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
5. 「ファイルの場所の指定」画面で次の操作を実行します。
- a. 「ソース」では、インストールする製品を表すパスをデフォルトのままにします。
- b. 「インストール先」には、新規の Oracle ホーム・ディレクトリの名前とパスを入力します。(デフォルトの Oracle ホーム名が設定されています。スペースを含むディレクトリ・パスは指定できません。正しいディレクトリ・パスを入力すると、Oracle Universal Installer によって新しいディレクトリが作成されます。)

**関連項目：**システム上の既存の Oracle ホームを検索する方法の詳細は、2-4 ページの「Oracle Database 10g Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックします。
7. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Companion Products」を選択して「次へ」をクリックします。
8. 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、「Apache Standalone」(Oracle HTTP Server)、「HTML DB」またはその両方を選択します。

---

**注意：**新規の Oracle ホームに Oracle HTML DB をインストールしている場合には、必ず Oracle HTTP Server を選択してください。

---

9. 「次へ」をクリックします。
10. 「HTML DB 構成情報の入力」画面で、Oracle HTML DB の構成に必要な情報を入力して「次へ」をクリックします。

Oracle HTML DB を構成するためには、Oracle Database に Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールする必要があります。Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) 以上のデータベースを選択してください。Oracle HTML DB が Oracle\*Net を使用してアクセスできる場合、別のサーバーに置くこともできます。Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の Oracle データベースを使用する場合、インストール中に入力する情報を基に、データベース・アクセス記述子 (DAD) が `mod_sql` 構成ファイルに、ディレクトリ別名が Oracle HTTP Server 構成ファイルに、Oracle Universal

Installer によって自動的に作成されます。ただし、リリース 2 (9.2.0.3) 以上のデータベース (リリース 1 (10.1) を除く) を使用する場合は、これらの設定は、第 4 章のインストール後の手順で説明している手順で手動で作成する必要があります。

Oracle HTML DB を構成するには、次の情報を指定します。

- **ホスト名**

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合は、localhost ではなくコンピュータの名前を入力します。

- **ポート**

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。

- **データベース・サービス名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名 (sales など) を指定します。かわりに、ドメイン名 (sales.us.mycompany.com など) を入力できます。ドメイン名は通常グローバル・データベース名と同じです。

- **SYS パスワード**

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

- **HTML DB パスワード**

HTML DB スキーマ (ユーザー) に使用するパスワードを指定します。HTML DB スキーマ (ユーザー) は、インストール時にデータベース内に作成されます。

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に ADMIN ユーザーとして接続できます。指定したパスワードは HTMLDB\_PUBLIC\_USER、FLOWS\_010500 および FLOWS\_FILES の各スキーマにも使用されます。HTMLDB\_PUBLIC\_USER スキーマは、データベースに接続するために mod\_plsql で使用されます。

- **HTML DB パスワードの確認**

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

- **表領域名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト (SYS\_AUX) を受け入れます。

11. 「サマリー」画面で、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。
12. インストールの終了画面で、Oracle HTTP Server で使用される URL を控えておきます。

---

---

**注意：** URL は %ORACLE\_HOME%\Apache\Apache\setupinfo.txt ファイルにも記載されています。

---

---

13. 「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
14. インストール・プロセス中に作成された一時ファイルが必要なければ、temp\OraInstalldate\_time ディレクトリを削除することもできます。OraInstalldate\_time ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。コンピュータを再起動した場合も、OraInstalldate\_time ディレクトリが削除されます。

**関連項目：** ソフトウェアのインストール後に完了する必要があるタスクについては、[第 4 章「Oracle Database Companion CD のインストール後のタスク」](#)を参照してください。

## 既存の Oracle HTTP Server ホームへの Oracle HTML DB のインストール

この項では、既存の Oracle HTTP Server ホームに Oracle HTML DB をインストールする方法について説明します。

1. Oracle のコンポーネントをインストールするコンピュータに、Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
2. Oracle HTML DB で使用する Oracle データベースが実行中でアクセス可能であることを確認します。
  - a. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」を選択し、Windows システムのコントロールパネルを表示します。
  - b. 使用している Windows システムに応じて、「サービス」アイコンをクリックするか、または「管理ツール」、続いて「サービス」アイコンをそれぞれダブルクリックします。
  - c. データベース (名前の前に OracleService が付く) を選択し、サービスが開始されていない場合には、名前を右クリックしてドロップダウン・メニューから「開始」を選択します。
3. 環境変数 ORACLE\_HOME があれば、これを削除します。

環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

---

---

**注意：** 環境変数 ORACLE\_HOME は自動的にレジストリに設定されます。この変数を手動で設定するとインストールが妨げられます。

---

---

4. 「Oracle Database 10g Companion CD Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD-ROM を挿入するか、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の DVD-ROM で companion ディレクトリに移動します。

ハード・ディスクからインストールする場合は、`setup.exe` をダブルクリックします。インストール・メディアからインストールしている場合、Autorun 画面が自動的に表示されます。Autorun 画面が表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」メニューから、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 次のように入力します。

```
DRIVE_LETTER:¥autorun¥autorun.exe
```

「ようこそ」画面が表示されます。

---

---

**注意：** 追加情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックします。

---

---

5. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
6. 「ファイルの場所の指定」画面で次の操作を実行します。
  - a. 「ソース」では、インストールする製品を表すファイルへのパスをデフォルトのままにします。
  - b. 「インストール先」では、Oracle HTTP Server の Oracle ホームが指定されていることを確認します。(デフォルトの Oracle Database ホームが設定されています。)

**関連項目：** Oracle ホームの確認方法の詳細は、2-4 ページの「[Oracle Database 10g Oracle ホーム・ディレクトリ](#)」を参照してください。各ホームを選択して Oracle HTTP Server を指す **Apache Standalone** を探します。

7. 「次へ」をクリックします。
8. 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Database 10g Companion Products」を選択して「次へ」をクリックします。
9. 「使用可能な製品コンポーネント」画面で、「HTML DB」を選択して「次へ」をクリックします。

---

---

**注意：**既存の Oracle ホーム・ディレクトリにこれらの製品をインストールしているため、Oracle HTTP Server は選択しないでください。Oracle HTTP Server は、「使用可能な製品コンポーネント」画面で「**Apache Standalone**」としてリストされています。

---

---

10. 「HTML DB 構成情報の入力」画面で、Oracle HTML DB の構成に必要な次の情報を入力して「次へ」をクリックします。

■ **ホスト名**

データベースがインストールされているシステムのホスト名を指定します。ホスト名がローカル・ホストの場合は、localhost ではなくコンピュータの名前を入力します。

■ **ポート**

データベース・システム上の Oracle Net Listener の TCP/IP ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1521 です。

■ **データベース・サービス名**

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをインストールするデータベースのデータベース・サービス名 (sales など) を指定します。かわりに、ドメイン名 (sales.us.mycompany.com など) を入力できます。ドメイン名は通常グローバル・データベース名と同じです。

■ **SYS パスワード**

データベースの SYS ユーザーのパスワードを指定します。

■ **HTML DB パスワード**

Oracle HTML DB スキーマ (ユーザー) に使用するパスワードを指定します。Oracle HTML DB スキーマ (ユーザー) は、インストール時にデータベース内に作成されます。

インストールが完了すると、このパスワードを使用して、Oracle HTML DB に管理ユーザーとして接続できます。指定したパスワードは HTMLDB\_PUBLIC\_USER、FLOWS\_010500 および FLOWS\_FILES の各スキーマにも使用されます。HTMLDB\_PUBLIC\_USER スキーマは、データベースに接続するために mod\_plsql で使用されます。

■ **HTML DB パスワードの確認**

正しいパスワードを指定したかどうかを確認するために、パスワードを再入力します。

- 表領域名

Oracle HTML DB データベース・オブジェクトをロードする表領域の名前を入力するか、デフォルト (SYS\_AUX) を受け入れます。

11. 「サマリー」画面で、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。
12. インストールを完了後、「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。
13. インストール・プロセス中に作成された一時ファイルが必要なければ、temp\OraInstalldate\_time ディレクトリを削除することもできます。OraInstalldate\_time ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。  
コンピュータを再起動した場合も、OraInstalldate\_time ディレクトリが削除されます。

**関連項目：** ソフトウェアのインストール後に完了する必要があるタスクについては、第 4 章「Oracle Database Companion CD のインストール後のタスク」を参照してください。

## Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除

次の項目について説明します。

- Oracle Database Products および Oracle Database Companion Products の削除
- データベースからの Oracle HTML DB の削除

## Oracle Database Products および Oracle Database Companion Products の削除

Oracle Universal Installer を使用して Oracle ソフトウェアを削除するには、次のようにします。

---

---

**注意：** Oracle ソフトウェアの削除には、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。Oracle Universal Installer を使用して先にソフトウェアを削除してから、Oracle ホーム・ディレクトリを削除してください。

---

---

1. Oracle HTTP Server および Oracle Process Manager and Notification サービスを停止します。

**関連項目：** 4-12 ページの「Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動」

2. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME\_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。

3. 「ようこそ」画面で「**製品の削除**」をクリックします。  
「インベントリ」画面が表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。
4. 「インベントリ」画面で、削除する Oracle ホームと製品を選択します。
5. 特定の製品を削除するには、ツリー・ウィンドウでその製品を選択します。
6. 「**削除**」をクリックします。  
選択した製品と依存コンポーネントを削除してよいか、確認する画面が表示されます。
7. 「**はい**」をクリックします。  
進行状況が表示されます。

## データベースからの Oracle HTML DB の削除

Oracle Universal Installer を使用して Oracle HTML DB を削除した後、Oracle HTML DB をデータベースから削除できます。

1. SYS や SYSTEM など権限のあるユーザーでデータベースに接続します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
SQL> ALTER SESSION SET current_schema = FLOWS_010500;  
SQL> EXEC wwv_flow_upgrade.drop_public_synonyms;  
SQL> ALTER SESSION SET current_schema = SYSTEM;  
SQL> DROP USER flows_010500 CASCADE;  
SQL> DROP USER flows_files CASCADE;  
SQL> DROP USER htmldb_public_user CASCADE;
```

---

# Oracle Database Companion CD の インストール後のタスク

この章では、ソフトウェアのインストール後に完了する必要があるタスクについて説明します。

次の項目について説明します。

- [Oracle HTTP Server](#) のインストール後のタスク
- [Oracle HTML DB](#) のインストール後のタスク

## Oracle HTTP Server のインストール後のタスク

Oracle HTTP Server をインストールした場合は、次の項で説明するタスクを完了してください。

次の項目について説明します。

- [ファイルのバックアップ](#)
- [以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行](#)
- [以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行](#)
- [mod\\_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行](#)
- [Oracle HTTP Server インストールの検証](#)

### ファイルのバックアップ

Oracle HTTP Server の構成ファイルおよびログ・ファイルのバックアップを作成することをお勧めします。構成ファイルとログ・ファイルは次の場所にあります。

```
%ORACLE_HOME%\%opmn%\conf
%ORACLE_HOME%\%opmn%\logs
%ORACLE_HOME%\%Apache%\Apache%\conf
%ORACLE_HOME%\%Apache%\Apache%\logs
%ORACLE_HOME%\%Apache%\modplsql%\conf
```

パッチを適用する前に、Oracle ホーム全体のバックアップを作成することをお勧めします。

### 以前のリリースの Oracle HTTP Server からの移行

以前のリリースの Oracle Server とともにインストールされた Oracle HTTP Server を現行のシステム上で使用している場合は、その HTTP Server の構成を現行のリリースに移行できます。

---

---

**注意：**この項では、Oracle Application Server の一部としてインストールされたリリースの Oracle HTTP Server から移行する方法については説明しません。この種の移行はサポートされません。

---

---

移行プロセスには次の 2 つの作業が含まれます。

- [以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行](#)
- [mod\\_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行](#)

## 以前の Oracle HTTP Server からの httpd.conf 構成ファイルの移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server の構成を現行リリースに移行するには、以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルをコピーして変更する必要があります。次の各項では、このタスクの実行方法について説明します。

### httpd.conf ファイルのコピーと編集

以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを、現行リリースの構成ファイル・ディレクトリにコピーします。

次の手順を実行します。

1. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する構成ファイル・ディレクトリに移動します。

```
cd ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf
```

2. httpd.conf ファイルのバックアップを作成します。

```
copy httpd.conf httpd.conf.orig
```

3. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する構成ファイル・ディレクトリのバックアップを作成します。

```
copy ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME
```

4. 構成ファイル・ディレクトリに移動します。

```
cd ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf
```

5. 以前のリリースで使用されている httpd.conf ファイルを、現行のディレクトリにコピーします。次に例を示します。

```
copy ¥OLD_ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf
```

6. テキスト・エディタで httpd.conf ファイルを開きます。

### 一括変更の実行

httpd.conf ファイルに対して一括変更を実行するには、次のようにします。

1. 以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリ・パスの出現箇所をすべて検索し、現行の Oracle ホーム・ディレクトリ・パスに置き換えます。
2. mod\_ssl.c の出現箇所をすべて mod\_oss1.c に変更します。

---

**注意：** SSL を使用していない場合にも、httpd.conf ファイル内の SSL 関連ディレクティブを変更することをお勧めします。

---

## LoadModule のディレクティブ・リストの変更

LoadModule ディレクティブのリストを変更するには、次のようにします。

1. 次のディレクティブを削除します。

```
LoadModule oprocmgr_module    libexec¥liboprocmmgr.so
LoadModule rewrite_module     libexec¥mod_rewrite.so
```

---

---

**注意：**このファイルには、後で mod\_rewrite モジュール用の LoadModule ディレクティブを追加する必要があります。

---

---

2. onsint モジュールをロードする次のディレクティブを、<IfDefine SSL> セクションの直前に追加します。

```
LoadModule onsint_module      libexec¥mod_onsint.so
```

3. <IfDefine SSL> セクションの LoadModule ディレクティブ内で、次のように ssl\_module を ossl\_module に変更し、mod\_ssl.so を mod\_ossl.so に変更します。

```
LoadModule ossl_module        libexec¥mod_ossl.so
```

## サポートされない機能に関するディレクティブとセクションの削除

サポートされない機能に関するディレクティブとセクションをすべて削除するには、次のようにします。

1. <IfModule mod\_alias.c> セクションから次のディレクティブを削除します。

```
Alias /jservdocs/ "¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Jserv¥docs¥"
Alias /soapdocs/ "¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥soap¥"
```

2. <IfModule mod\_fastcgi> セクションから次のディレクティブを削除します。

```
FastCGIServer fcgi-bin/echo -initial-env ORACLE_HOME ¥
                        -initial-env NLS_LANG
```

3. 次のインクルード・ディレクティブを削除します。

```
include "/ORACLE_BASE/ORACLE_HOME/Apache/Jserv/etc/jserv.conf"
```

4. <IfModule mod\_oprocmmgr.c> セクションを削除します。

## ポート番号の変更

httpd.conf ファイルは、Oracle HTTP Server または Oracle Database とともにインストールされた以前のリリースの Oracle HTTP Server によって使用されます。このファイルには、SSL 対応サーバーを起動したかどうかに応じて、非 SSL (HTTP) リクエスト用に異なるポートが指定されています。次の例では、これらのポートが `port1` および `port2` として示されています。

```
Port port1
Listen port1

<IfModule mod_oss1.c>
  Port port2
  Listen port2
  Listen SSL_port
</IfModule>
```

これらのディレクティブを次のように変更することをお勧めします。

1. SSL を使用していなかった場合は、次のディレクティブを削除します。

```
Port port2
Listen port2
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストを `port1` ポートでリスニングします。

2. SSL 用に定義されたポートのみを使用していた場合は、各ディレクティブを次の例に示すように変更します。

```
Port port2
Listen port2

<IfModule mod_oss1.c>
  Listen SSL_port
</IfModule>
```

Oracle HTTP Server は HTTP リクエストを `port2` ポート、HTTPS リクエストを `SSL_port` ポートでリスニングします。

3. 以前のリリースの Oracle HTTP Server をこのリリースと並行して使用し続ける場合は、Port および Listen ディレクティブに指定されているポートを未使用のポートに変更します。
4. 前述の手順で `SSL_port` を変更した場合は、次のようにします。
  - a. `<VirtualHost_default_:SSL_port>` ディレクティブを検索し、`SSL_port` の値が `<IfModule mod_oss1.c>` セクションの Listen ディレクティブに指定されている値と一致することを確認します。
  - b. `<VirtualHost_default_:SSL_port>` セクションで、Port ディレクティブに指定されているポート番号が `SSL_port` と同じであることを確認します。

## 既存のセクションとディレクティブの変更

httpd.conf のセクションとディレクティブを変更するには、次のようにします。

1. デフォルト・ディレクトリのセクション <Directory /> で、Options ディレクティブに MultiViews オプションを追加します。次に例を示します。

```
<Directory />
    Options FollowSymLinks MultiViews
    AllowOverride None
</Directory>
```

2. <IfModule mod\_alias.c> セクションに新しい <IfModule mod\_perl.c> セクションを作成し、このセクションに /perl/ の別名を定義する Alias ディレクティブを移動します。次に例を示します。

```
<IfModule mod_alias.c>
...
    <IfModule mod_perl.c>
        Alias /perl/ "%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\Apache%\Apache%\cgi-bin%"
    </IfModule>
...
</IfModule>
```

3. <IfModule mod\_dms.c> セクションを次の例のように変更します。hostname および domain 変数を適切な値に置き換えます。

```
<IfModule mod_dms.c>
    <Location /dms0>
        SetHandler dms-handler
        Order deny,allow
        Deny from all
        Allow from localhost hostname.domain hostname
    </Location>
</IfModule>
```

4. PERL5LIB 環境変数を設定するディレクティブで、Perl ディレクトリの位置とバージョンを次の例に示すように編集します。

```
SetEnv PERL5LIB
"%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\perl\5.6.1\lib;%ORACLE_BASE%\ORACLE_HOME%\perl\site\5.6.1\lib"
```

この設定は 1 行で入力してください。

## 新規のセクションとディレクティブの追加

http.conf ファイルに新規のセクションとディレクティブを追加するには、次のようにします。

1. 次のセクションを追加して WEB-INF ディレクトリを保護します。

```
#Protect WEB-INF directory

<DirectoryMatch /WEB-INF/>
    Order deny,allow
    Deny from all
</DirectoryMatch>
```

2. oracle\_apache.conf ファイルをインクルードする行の前に次の行を追加します。

```
# Include the configuration files needed for mod_oc4j
include "¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥mod_oc4j.conf"

# Loading mod_rewrite module here as it loads before mod_oc4j
LoadModule rewrite_module    modules/ApacheModuleRewrite.dll
```

## サーバー証明書と秘密鍵の移行

SSL を使用しており、既存のサーバー証明書と秘密鍵がある場合は、このリリースの Oracle HTTP Server でそれらを使用する前に、mod\_oss1 で必要な書式に移行する必要があります。

既存のサーバー証明書と秘密鍵を移行するには、次のようにします。

1. 次の構文を使用したコマンドを別の端末ウィンドウに入力します。

```
¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥bin¥ssl2oss1 -cert cert_file ¥
                -key key_file ¥
                { [ -chain chain_file ] |
                  [ -cafile CA_file ] |
                  [ -capath CA_path ] } ¥
                -wallet wallet_path ¥
                [ -certpass key_file_pwd ] ¥
                [ -wltpass wallet_pwd ] ¥
                [ -ssowallet yes ] ¥
                [ -validate yes ]
```

次の表に、ssl2oss1 コマンドで使用可能な各オプションの推奨値を示します。

---

**注意：** オプション -chain、-cafile、-capath から 1 つ以上を指定する必要があります。

---

オプション	推奨値
-cert	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。
-key	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateKeyFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。
-chain	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCertificateChainFile ディレクティブの前にコメント文字 (#) が付いていない場合は、そのディレクティブに指定されていた値を使用します。 <b>注意:</b> SSLCertificateChainFile ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、-chain オプションを指定しないでください。
-cafile	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCACertificateFile ディレクティブに指定されていた値を使用します。 <b>注意:</b> SSLCACertificateFile ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、-cafile オプションを指定しないでください。
-capath	以前のリリース用の httpd.conf ファイル内で SSLCACertificatePath ディレクティブに指定されていた値を使用します。 <b>注意:</b> SSLCACertificatePath ディレクティブが指定されていない場合、またはコメント文字で始まっていない場合は、-capath オプションを指定しないでください。
-wallet	Wallet を作成するディレクトリへのパスを指定します。デフォルト値は次のとおりです。 %ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%Apache%conf%ssl.wlt%default
-certpass	秘密鍵ファイルが暗号化されている場合は、そのパスワードを指定します。
-wltpass	新規 Wallet のパスワードを指定します。 このオプションを指定しないと、ss12oss1 ユーティリティでは Wallet パスワードの入力と確認を求めるプロンプトが表示されます。
-ssowallet	Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を作成するには、値 yes を指定します。
-validate	Wallet が正常に変換されるかどうかを検証するには、値 yes を指定します。このオプションに値 yes を指定すると、Wallet は作成されません。

2. オプションで、次のようなコマンドを入力し、`ssl2oss1` コマンドに指定した Wallet パスワードの暗号化バージョンを生成できます。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%Apache%bin%iasobf -p wallet_pwd
```

---

**注意：** `ssl2oss1` コマンドで `-ssowallet` オプションを指定した場合、この手順を実行する必要はありません。それ以外の場合は、`httpd.conf` ファイルでパスワードを指定する必要があるため、パスワードは暗号化することをお勧めします。

---

このコマンドの出力は、`-p` オプションに指定したパスワードの暗号化バージョンです。次の項では、この値を `SSLWalletPassword` ディレクティブに対して指定する必要があります。

## Secure Sockets Layer セクションとディレクティブの変更

---

**注意：** 現在 Secure Sockets Layer (SSL) を使用していない場合にも、`httpd.conf` ファイル内の SSL 関連のセクションとディレクティブを変更することをお勧めします。

---

<IfModule mod\_oss1.c> セクションの各ディレクティブを次のように変更します。

1. `SSLSessionCache` ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLSessionCache
shmcb:/ORACLE_BASE/ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs/ssl_scache(512000)
```

2. `SSLCipherSuite` ディレクティブの設定を次のように変更します。

```
SSLCipherSuite SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA:SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5:
SSL_RSA_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA:SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA:
SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA:SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5
```

3. 次のディレクティブとその関連コメントを削除します。

```
SSLRandomSeed
SSLCertificateFile
SSLCertificateKeyFile
SSLCertificateChainFile
SSLCACertificateFile
SSLCACertificatePath
SSLVerifyDepth
```

4. <VirtualHost\_default\_:SSL\_port> セクションに、次の行を追加します。

```
# Server Wallet:
# The server wallet contains the server's certificate, private key
# and trusted certificates. Set SSLWallet at the wallet directory
# using the syntax: file:<path-to-wallet-directory>
SSLWallet file:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥ssl.wlt¥default

# Server Wallet Password:
# Both clear text wallet password and obfuscated password are allowed
# here. An obfuscated one is recommended.
# Examples:
# SSLWalletPassword <clear_pass>
# SSLWalletPassword <obfuscated_pass>
#SSLWalletPassword ...
```

5. サーバー証明書と秘密鍵を移行した場合は、次のようにします。
  - a. SSLWallet ディレクティブにデフォルト以外の値が指定されている場合は、それを変更して Wallet のパスを指定します。
  - b. Oracle Single Sign-On と互換性のある Wallet を（前項で `-ssowallet yes` オプションを使用して）作成していない場合は、SSLWalletPassword ディレクティブからコメントを削除し、値としてクリアテキストまたは暗号化形式の Wallet パスワードを指定します。

## 新規ディレクトリへの必須ファイルのコピーまたは移動

ファイル用のスクリプトを、ドキュメント・ルート・ディレクトリおよびスクリプト・ディレクトリから、新規リリース用の同等のディレクトリにコピー（または移動）します。

以前のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリのうち、サブディレクトリにあるファイルのみをコピーまたは移動する必要があります。他の位置にある別名ディレクトリは、そのディレクトリと内容に対するアクセス権においてサーバーによる読取りが許可されていれば、引き続きアクセスできます。User または Group ディレクティブを変更した場合は、これらのアクセス権の変更が必要になることがあります。

該当する場合は次のファイルをコピーします。

- DocumentRoot または Alias ディレクティブに指定されているディレクトリ内のファイルとサブディレクトリ
- ScriptAlias ディレクティブに指定されているディレクトリにある CGI、Perl、FastCGI の各プログラム、スクリプトおよびその関連ファイル

## mod\_plsql で使用されるデータベース・アクセス記述子の移行

以前のリリースの Oracle HTTP Server を含むデータベースへのアクセスに mod\_plsql を使用していた場合は、データベース・アクセス記述子 (DAD) を現行リリースの mod\_plsql で必要な書式に移行する必要があります。dadTool.pl Perl スクリプトを使用すると、この移行タスクを完了できます。

このスクリプトを実行するには、次のようにします。

1. ORACLE\_HOME 環境変数を設定して現行リリース用の Oracle ホーム・ディレクトリへのパスを指定し、PATH 環境変数を設定して perl 実行可能ファイルを含むディレクトリと dadTool.pl スクリプトの場所を組み込みます。

次に例を示します。

```
set PATH=%ORACLE_BASE%\%ORACLE_HOME%\Apache\modplsql\conf;
    %ORACLE_BASE%\%ORACLE_HOME%\perl\5.6.1\bin\MSWin32-x86;%PATH%
```

この設定は 1 行で入力してください。

2. PATH に ORACLE\_BASE\ORACLE\_HOME\bin が含まれていない場合には、PATH 文でインクルードします。

次に例を示します。

```
set PATH=c:\oracle\product\10.1.0\Db_1\bin;%PATH%
```

3. 現行リリースの Oracle HTTP Server に使用する mod\_plsql 構成ディレクトリに移動します。

```
cd ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\modplsql\conf
```

4. 以前のリリースで使用されていた DAD 構成ファイル (wdbsvr.app) を、このディレクトリにコピーします。

```
copy OLD_ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Apache\modplsql\cfg\wdbsvr.app
```

5. 次のコマンドを入力して dadTool スクリプトを実行します。

```
perl dadTool.pl -m
```

dadTool スクリプトは、wdbsvr.app ファイルから DAD 情報を読み取って、dads.conf ファイルに同様の DAD を新たに作成します。

## Oracle HTTP Server インストールの検証

Oracle HTTP Server のインストールを検証するには、製品の高可用性機能を有効にし、Oracle HTTP Server を起動、停止および再起動します。

---

---

**注意：** このリリースの Oracle HTTP Server の起動と停止については、`apachectl` スクリプトはサポートされていません。

---

---

### Oracle HTTP Server の高可用性機能の有効化

Oracle HTTP Server の高可用性機能を有効にするためには、Oracle Process Manager and Notification サーバー (OPMN) を Oracle HTTP Server とともに使用する必要があります。OPMN を使用するには、最初に OPMN サービスを起動します。OPMN サービスと Oracle HTTP Server プロセスを一緒に起動するには、次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl startall
```

OPMN サービスが実行中の場合には、Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動できます。

### Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動

前述の項で説明した OPMN サービスが実行中の場合には、次のコマンドを使用して Oracle HTTP Server を起動、停止または再起動してください。

- Oracle HTTP Server のみを起動する場合：

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```

または、「スタート」メニューから、「プログラム」 → 「Oracle Application Server - HOME\_NAME」 → 「Oracle HTTP Server」 → 「Oracle HTTP Server の起動」を選択します。

- Oracle HTTP Server のみを再起動する場合：

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

- Oracle HTTP Server のみを停止する場合：

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```

または、「スタート」メニューから、「プログラム」 → 「Oracle Application Server - HOME\_NAME」 → 「Oracle HTTP Server」 → 「Oracle HTTP Server の停止」を選択します。

OPMN サービスと Oracle HTTP Server 両方のプロセスを停止するには、次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl stopall
```

## Oracle HTML DB のインストール後のタスク

Oracle HTML DB をインストールした場合は、次の項に記載されているタスクを完了してください。

- [Oracle HTTP Server の起動または再起動](#)
- [Oracle HTML DB インストールの検証](#)
- [Oracle9i Database での Oracle HTTP Server 用の Oracle HTML DB の構成](#)

### Oracle HTTP Server の起動または再起動

既存の Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle HTML DB をインストールした場合、Oracle HTTP Server を再起動する必要があります。「スタート」メニューから、Oracle HTTP Server をインストールした Oracle ホームの下にある起動または停止オプションを選択します。

**関連項目：** 4-12 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)」

### Oracle HTML DB インストールの検証

Oracle HTML DB のインストールを検証するには、Oracle HTML DB の管理ページを Web ブラウザで開いてみてください。Oracle HTML DB アプリケーションを表示または開発するには、Web ブラウザで JavaScript と HTML 4.0 および CSS 1.0 規格がサポートされている必要があります。この要件を満たしているブラウザは、次のとおりです。

- Netscape Communicator 7.0 以上
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上
- Mozilla 1.2 以上

次の手順を実行します。

1. Web ブラウザで次の URL を開きます。

```
http://hostname:port/pls/database_access_descriptor/htmldb_admin
```

各項目の意味は次のとおりです。

- *hostname* は Oracle HTTP Server がインストールされているシステムの名前です。
- *port* は Oracle HTTP Server に割り当てられているポート番号です。デフォルトのインストールではこの番号は 7777 です。Oracle HTTP Server のインストールのポート番号に関する情報は、次のいずれかのファイルで確認できます。
  - ORACLE\_BASE¥ORACLE\_HOME¥install¥portlist.ini
  - ORACLE\_BASE¥ORACLE\_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf

- `database_access_descriptor` では、Oracle HTTP Server が HTTP リクエストに対応できるようにデータベース・サーバーに接続する方法が記述されています。デフォルト値は `htmldb` です。
- 2. ユーザー名 `ADMIN` とインストール時に指定したパスワードを使用して、Oracle HTML DB にログインします。

データベース・オブジェクトを作成したときに `FLows` ユーザーに対して指定したパスワードを使用してください。

**関連資料：**

- データベース・アクセス記述子の機能の詳細は、`ORACLE_BASE%ORACLE_HOME%Apache%modplsql%conf%dads.readme` を参照してください。
- Oracle HTML DB の使用、アプリケーション開発および管理の詳細は、『Oracle HTML DB ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## Oracle9i Database での Oracle HTTP Server 用の Oracle HTML DB の構成

リリース 2 (9.2.0.3) 以上 (ただし 10g 以外) の Oracle Database で動作するよう Oracle HTML DB を構成するには、次の手順を実行する必要があります。

1. `%ORACLE_HOME%¥marvel¥images` にある Oracle Database の `images` ディレクトリを、Oracle9i ホームの新しい `images` ディレクトリにコピーします。
2. Oracle9i の `httpdb.conf` ファイルを変更し、Oracle Database 10g の Oracle HTML DB から手順 1 で作成した Oracle9i の `images` ディレクトリを示す別名を追加します。
3. Oracle9i の `wdbsvr.app` ファイルを変更し、Oracle HTTP Server が HTTP リクエストに対応できるように Oracle HTTP Server からデータベース・サーバーへの接続方法を指定するデータベース・アクセス記述子 (DAD) を追加します。
4. Oracle HTTP Server を停止して再起動します。
5. 10g ホームの Oracle HTTP Server を削除します。

### Oracle Database 10g の images ディレクトリから Oracle9i の images ディレクトリへのコピー

Oracle Database のインストール環境から、`%ORACLE_HOME%¥marvel¥images` にある `images` ディレクトリを、Oracle9i のインストール環境の新しい `images` ディレクトリにコピーします。次の例では、Oracle9i ホームを `%ORACLE_HOME_9%`、Oracle Database 10g ホームを `%ORACLE_HOME_10g%` とします。次に例を示します。

```
c:¥>xcopy /E /I ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME_10g¥marvel¥images
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME_9¥images
```

このコマンドは 1 行で入力してください。

## Oracle9i httpd.conf ファイルの変更

次に、Oracle9i httpd.conf ファイルを変更し、前の手順で作成した images ディレクトリの Oracle9i ファイル・システムのパスを示すようにします。

次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタで %ORACLE\_HOME\_9%\Apache\Apache\conf にある httpd.conf ファイルを開きます。
2. Oracle9i images ディレクトリのファイル・システム・パスを示す、/i/ という名前の別名を追加します。次に例を示します。

```
Alias /i/ "E:\oracle\ora92\images/"
```

3. httpd.conf を保存して終了します。

## Oracle9i wdbsvr.app ファイルの変更

wdbsvr.app ファイルには、データベース・アクセス記述子 (DAD) に関する情報が格納されています。DAD は、HTTP リクエストに対応するための Oracle HTTP Server からデータベース・サーバーへの接続方法を指定する一連の値です。DAD を作成して Oracle HTML DB インスタンスへの接続方法を指定する必要があります。

次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタで %ORACLE\_HOME\_9%\Apache\modplsql\cfg にある wdbsvr.app ファイルを開きます。
2. 次の構文を使用して Oracle HTML DB のエントリを追加します。イタリックで記載した設定箇所だけを変更してください。

```
[DAD_htmldb]
connect_string = hostID:port_number:databaseSID
password = password
username = htmldb_public_user
default_page = htmldb
document_table = wwv_flow_file_objects$
document_path = docs
document_proc = wwv_flow_file_mgr.process_download
reuse = Yes
enablesso = No
stateful = STATELESS_RESET
nls_lang = database_nls_lang
```

それぞれの意味は次のとおりです。

- `connect_string` には、Oracle HTML DB の接続先のホスト ID、ポート番号および Oracle9i データベースを指定します。次に例を示します。

```
138.2.84.182:1521:orcl
```

使用する Oracle9i バージョンの Oracle HTTP Server が、Oracle HTML DB で使用するよう指定したデータベースと同じ Oracle ホームにインストールされている場合、この設定は空白にできます。

- `password` には、Oracle HTML DB をインストールしたときに入力したパスワードを指定します。
- `nls_lang` は言語設定です。データベースの `NLS_LANG` と同じ値を指定します。次に例を示します。

```
American_America.AL32UTF8
```

データベースの `NLS_LANG` 設定を調べるには、`NSL_DATABASE_PARAMETERS` ビューを問い合わせます。

この他の設定は、`username` 設定も含めてそのまま変更しないことをお薦めします。

3. `wdbsvr.app` を保存して終了します。

## Oracle HTTP Server の停止と再起動

`httpdb.conf` と `wdbsvr.app` への変更を有効にするために、Oracle HTTP Server を停止して再起動します。

**関連項目：** 4-12 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)」

## 10g ホームの Oracle HTTP Server の削除

ここまでの手順を完了したら、10g ホームの Oracle HTTP Server は必要ありません。すべての Oracle HTML DB コードは、インストール時に指定したデータベース・サーバー内に PL/SQL としてコンパイルされており、Oracle Database 10g の `images` ディレクトリは Oracle9i ホームへコピーしました。

10g の Oracle HTTP Server を使用する予定がなければ、次の手順を実行します。

1. Oracle Database 10g ホームから Oracle Universal Installer を実行します。
2. 「製品の削除」を選択し、指示に従って 10g ホームの Oracle HTTP Server を削除します。

---

# Oracle Database Companion CD の高度な インストール項目

この付録では、高度なインストール項目について説明します。

次の項目について説明します。

- 非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール
- 異なる言語で Oracle コンポーネントをインストールおよび使用

## 非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール

通常、Oracle Universal Installer は対話型モードで実行します。つまり、Graphical User Interface (GUI) 画面で情報を指定するよう要求されます。かわりに、Oracle Universal Installer を非対話型モードで実行できます。非対話型モードは、サイレント・モードまたはサイレント・インストールとも呼ばれます。

次の状況で Oracle Database Companion CD 製品のインストールに非対話型モードを使用できます。

- Companion CD 製品をユーザーの操作なしで複数のノードにデプロイする必要があります。非対話型インストール・モードは、オペレーティング・システムのスケジューラまたはサイトで通常使用するその他のジョブ・サブシステムからスケジュールできます。この方法は、多くの Oracle Database のインストールが必要な大規模なサイトで特に役立ちます。
- ユーザーとの相互作用が予定されていません。
- 対話型モードで Oracle Universal Installer を実行するグラフィカル機能が使用できません。(Oracle Universal Installer は Windows では常に使用可能ですが、UNIX システムでは使用できない場合もあります。)

この項では、非対話型モードで Oracle Universal Installer を実行する際のレスポンス・ファイルの使用方法に関して次の項目について説明します。

- [レスポンス・ファイルを使用した非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ](#)
- [新規レスポンス・ファイルの作成](#)
- [Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)
- [レスポンス・ファイルのコピーおよび変更](#)
- [Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)

## レスポンス・ファイルを使用した非対話型モードでの Oracle コンポーネントのインストール

非対話型モードを使用するには、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer によって使用される変数と値を含むテキスト・ファイルです。Oracle では、カスタマイズ可能なサンプル・レスポンス・ファイルのセットを提供します。また、インストールの選択内容を記録することによって独自のレスポンス・ファイルを作成できます。

**関連資料：** レスポンス・ファイルの形式の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。

### サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ

表 A-1 に、「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD の ¥Response ディレクトリにあるサンプル・レスポンス・ファイルを示します。

**表 A-1 レスポンス・ファイル**

レスポンス・ファイル名	このファイルでサイレントに実行するインストール・タイプ
companionCD.db.rsp	「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプ
companionCD.midtier.rsp	「Oracle Database 10g Companion Products」インストール・タイプ

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更するには、次のようにします。

- 適切なレスポンス・ファイルを「Oracle Database 10g Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD の ¥Response ディレクトリからハード・ドライブにコピーします。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME\_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。  
『Oracle Universal Installer Concepts Guide』が HTML 形式で表示されます。
- レスポンス・ファイルと『Oracle Universal Installer Concepts Guide』両方の指示に従い、テキスト・ファイル・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。
- A-6 ページの「Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定」の指示に従い、レスポンス・ファイルを実行します。

## 新規レスポンス・ファイルの作成

対話型モードで Oracle Universal Installer を実行する場合、レスポンス・ファイルにインストールでの選択内容を記録できます。これを行うには、「記録」モードで Oracle Universal Installer を実行します。Oracle Universal Installer により、「サマリー」ページを完了した後すぐにレスポンス・ファイルが生成されます。その結果、レスポンス・ファイルを作成するために Oracle Database Companion CD 製品を実際にインストールする必要はありません。

非対話型のインストール中に「記録」モードを使用すると、Oracle Universal Installer によって元のソースのレスポンス・ファイルで指定された変数値が新しいレスポンス・ファイルに記録されます。

---

---

**注意：**「標準」インストール・タイプに基づいてレスポンス・ファイルを作成する場合は、「記録」モードは使用できません。

---

---

新規レスポンス・ファイルを作成するには、次のようにします。

1. レスポンス・ファイルを作成するコンピュータが第 2 章に記載されている要件を満たしていることを確認してください。

2. コマンドプロンプトで、cd コマンドを使用して Oracle Universal Installer の setup.exe 実行可能ファイルを含むディレクトリに変更します。

インストール用の CD-ROM または DVD の場合、setup.exe はディスク 1 にあります。Oracle Universal Installer を既存の Oracle Database Companion CD の環境から実行する場合、setup.exe は %ORACLE\_HOME%\oui\bin にあります。

3. 次のコマンドを入力します。

```
setup -record -destinationFile response_file_name
```

response\_file\_name を新規のレスポンス・ファイルの完全なパスに置き換えます。次に例を示します。

```
setup -record -destinationFile C:\response_files\install_oracle10g
```

4. Oracle Universal Installer が起動された後、インストールの設定を入力します。この設定がレスポンス・ファイルに記録されます。

5. 「サマリー」ページが表示されたら、次のいずれかを実行します。

- インストールを続行する場合は、「インストール」をクリックします。
- レスポンス・ファイルのみを作成し、インストールは続行しない場合は、「取消」をクリックします。インストールは終了しますが、入力した設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

その後、Oracle Universal Installer によりコマンドラインで指定したパスとファイル名を使用して新規レスポンス・ファイルが保存されます。

6. 必要に応じて、レスポンス・ファイルを実行するコンピュータ用にレスポンス・ファイルに対して環境固有の変更を行います。
7. 次の「[Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)」の指示に従い、レスポンス・ファイルを実行します。

## Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定

コマンドラインで Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定します。Oracle Universal Installer の実行可能ファイル `setup.exe` では、いくつかのオプションが用意されています。これらのオプションすべてのヘルプ情報については、次のように `setup.exe` を `-help` オプションで実行します。

```
C:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥oui¥bin> setup.exe -help
```

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定するには、次のようにします。

1. コマンドプロンプトを起動します。
2. Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。
3. コマンドラインで Oracle Universal Installer を適切なレスポンス・ファイルとともに実行します。次に例を示します。

```
C:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥oui¥bin> setup.exe [-silent]
[-nowelcome] [-nowait] -responseFile filename
```

要素	説明
<code>filename</code>	レスポンス・ファイルのフルパスを示します。
<code>-silent</code>	サイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行し、「ようこそ」画面が表示されなくなります。 <code>-silent</code> を使用する場合、 <code>-nowelcome</code> は不要です。
<code>-nowelcome</code>	インストール中に表示される「ようこそ」画面を表示されなくなります。
<code>-nowait</code>	サイレント・インストールが完了したときにコンソール・ウィンドウを閉じます。

**関連資料:**

- レスポンス・ファイルを使用するインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用する削除の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の製品の削除に関する項を参照してください。

## レスポンス・ファイルのコピーおよび変更

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更するには、次のようにします。

1. 適切なファイルを「Oracle Database 10g Companion CD Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD の ¥Response ディレクトリからハード・ドライブにコピーします。
2. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME\_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。  
『Oracle Universal Installer Concepts Guide』が HTML 形式で表示されます。
3. レスポンス・ファイルと『Oracle Universal Installer Concepts Guide』両方の指示に従い、テキスト・ファイル・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。

## Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定するには、次のようにします。

1. コマンドプロンプトに移動します。
2. Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。
3. 適切なレスポンス・ファイルを実行します。次に例を示します。

```
C:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥oui¥bin> setup.exe [-silent]
[-nowelcome] [-nowait] -responseFile filename
```

要素	説明
<i>filename</i>	特定のレスポンス・ファイルのフルパスを示します。
-silent	完全なサイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行します。「ようこそ」画面が自動的に表示されなくなります。 -silent を使用する場合、-nowelcome は不要です。
-nowelcome	インストール中に表示される「ようこそ」画面を表示されなくなります。
-nowait	サイレント・インストールが完了したときにコンソール・ウィンドウを閉じます。

要素	説明
-help	setup.exe のすべてのオプションに関するヘルプ情報を表示します。

**関連資料：**

- レスポンス・ファイルを使用するインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用する削除の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の製品の削除に関する項を参照してください。

## 異なる言語で Oracle コンポーネントをインストールおよび使用

次の機能について説明します。

- [異なる言語で Oracle Universal Installer を実行](#)
- [異なる言語での Oracle コンポーネントの使用](#)

## 異なる言語で Oracle Universal Installer を実行

Oracle Universal Installer は、デフォルトでは使用するオペレーティング・システムの選択された言語で実行されます。次のその他の言語で Oracle Universal Installer を実行することができます。

- ポルトガル語（ブラジル）
- ドイツ語
- 日本語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行するには、次のようにします。

1. オペレーティング・システムの実行に使用している言語を変更します。たとえば、Windows 2000 の場合、次のようにします。
  - a. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「地域のオプション」を選択します。
  - b. 前述の一覧から言語を選択し、「OK」を選択します。
2. 『Oracle Database インストレーション・ガイド』の指示に従い、Oracle Universal Installer を実行します。

---

---

**注意：** 選択した言語は、NLS\_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられます。

---

---

## 異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント（Oracle Net Configuration Assistant、Database Configuration Assistant など）の使用に他の言語を選択できます。Oracle Universal Installer を実行する言語は変更されないことに注意してください。Oracle を選択した言語で実行する場合、その言語はオペレーティング・システムの言語設定と同じである必要があります。オペレーティング・システムの言語は、「コントロールパネル」の「地域のオプション」ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用するには、次のようにします。

1. 第3章「Oracle Database Companion CD のソフトウェアのインストール」の指示に従って、Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「インストール・タイプの選択」画面で、「製品の言語」ボタンを選択します。  
「言語の選択」画面が表示されます。
3. 「使用可能な言語」フィールドから Oracle コンポーネントの使用時に使用する言語を選択します。
4. > 矢印を使用して「選択された言語」フィールドに言語を移動し、「OK」をクリックします。
5. インストールする適切な製品を選択し、「次へ」をクリックします。

インストールが完了すると、インストールしたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが選択した言語で表示されます。

---

---

## Oracle Database Companion CD の トラブルシューティング

この付録では、トラブルシューティングについて説明します。

次の項目について説明します。

- [インストール・セッションのログの確認](#)
- [インストール失敗後のクリーン・アップ](#)
- [HTML DB イメージ・ディレクトリの別名](#)

## インストール・セッションのログの確認

Oracle Universal Installer を最初に行うと、システムにインストールされる製品のインベントリと他のインストール情報を記録するために、`DRIVE_LETTER:¥%ORACLE_HOME%¥Inventory¥logs` ディレクトリが作成されます。

ログ・ファイルの名前は `installActionsdate_time.log` で、`date_time` はインストールの日付と時刻です。たとえば `installActions2004-055-14_09-00-56-am.log` などです。

Oracle Universal Installer の画面で「インストール済の製品」をクリックしても、インストール済コンポーネントのリストを確認できます。

---

---

**注意：** `Inventory` ディレクトリとその内容は、削除したり手動で変更したりしないでください。システムにインストールされた製品を Oracle Universal Installer で特定できなくなります。

`installActionsdate_time.log` ファイルには、インストール・プロセス中に実行されたアクションのログが記録されます。インストール中にリンク・エラーがあれば、それもこのファイルに記録されます。`installActionsdate_time.log` ファイルは削除または変更しないでください。

---

---

## インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合は、インストール中に作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。ファイルを削除するには、次のようにします。

1. 4-12 ページの「[Oracle HTTP Server の起動、停止および再起動](#)」の手順に従って Oracle HTTP Server を停止します。
2. 「Oracle Database 10g Companion CD Release 1 (10.1.0)」というラベルの CD-ROM を挿入するか、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の DVD-ROM で Oracle Database Companion CD の場所に移動します。

ハード・ディスクからインストールする場合は、`setup.exe` をダブルクリックします。

インストール・メディアからインストールしている場合、Autorun 画面が自動的に表示されます。Autorun 画面が表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」メニューから、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 次のように入力します。

```
DRIVE_LETTER:¥autorun¥autorun.exe
```

「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「ようこそ」画面の「製品の削除」をクリックするか、Oracle Universal Installer の画面から「インストール済の製品」をクリックします。「インベントリ」画面が表示され、インストールされている製品の一覧が表示されます。
4. 削除する製品を選択して「削除」をクリックします。

---

---

**注意：**システムに複数のインストール環境がある場合、他の Oracle ホームにインストールされている製品も「インベントリ」画面に表示されます。他の Oracle ホームから製品を選択すると、それらの製品も削除されます。

---

---

5. Oracle HTTP Server をインストールした場合は、失敗したインストールで使った Oracle HTTP Server の Oracle ホーム・ディレクトリを手動で削除します。

## HTML DB イメージ・ディレクトリの別名

Oracle HTML DB Configuration Assistant は、Oracle HTML DB イメージ・ディレクトリの別名 `/i/` を定義します。別名 `/i/` がすでに定義されている場合、Oracle HTTP Server は別名 `/i/` の最初の定義を使用します。Oracle HTML DB イメージが適切に表示されない場合は、次のいずれかを実行してください。

- 可能な場合は、`/i/` の最初のインスタンスを他の別名に変更します。
- または、`%ORACLE_HOME%\marvel\images` ディレクトリから、最初の別名 `/i/` で定義されたディレクトリにイメージをコピーします。



---

---

# 索引

## A

---

Administrators グループ

Oracle インストール時の要件, 3-7, 3-9, 3-12  
apachectl スクリプト, 4-12

## C

---

CD-ROM

ドライブ, インストール, 3-4  
ハード・ドライブへのコピー, 3-3

CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピー, 3-3

companionCD.db.rsp レスポンス・ファイル, A-3  
companionCD.midtier.rsp レスポンス・ファイル, A-3

## D

---

DAD, 「データベース・アクセス記述子」を参照

DHCP コンピュータ, インストール, 2-8

DVD

ドライブ, インストール, 3-4  
ハード・ドライブへのコピー, 3-3

## F

---

FAT 32 システム, Oracle HTTP Server ハードウェア要件, 2-6

## H

---

hostname コマンド, 2-9

HTML DB イメージ・ディレクトリ, B-3

httpd.conf ファイル, 移行, 4-3

## I

---

ipconfig コマンド, 2-9

IP アドレス, 複数, 2-9

## J

---

JPublisher

Oracle SQLJ Runtime, 1-4  
Oracle SQLJ Translator, 1-4  
インストール, 3-7  
概要, 1-3

## L

---

Legato NetWorker, 2-3

Legato Single Server Version

インストール, 3-7  
概要, 1-4

LoadModule ディレクティブ, 4-4

## M

---

mod\_plsql, データベース・アクセス記述子の移行, 4-11

## N

---

NTFS システム, Oracle HTTP Server ハードウェア要件, 2-6

## O

---

OPMN, 「Oracle Process Manager and Notification サービス」を参照

- Oracle Database
  - 以前のリリースの HTTP Server へのアクセス, 4-11
- Oracle Database 10g Companion Products, 1-6
  - Oracle HTML DB, 1-8
  - Oracle HTTP Server, 1-6
    - インストール可能な製品, 1-6
    - 概要, 1-6
    - 新規 Oracle ホームへのインストール, 3-9
    - 要件, 2-5
- Oracle Database 10g Products, 1-2
  - JPublisher, 1-3
  - Legato Single Server Version, 1-4
  - Oracle Database Examples, 1-3
  - Oracle Text のナレッジ・ベース, 1-5
  - Oracle ホーム・ディレクトリ, 指定, 2-4
    - インストール, 3-7
    - インストール可能な製品, 1-2
    - データベース要件, 2-4
    - ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ, 1-5
    - 必要なディスク領域, 2-4
    - 要件, 2-3
- Oracle Database Companion CD, 1-1
  - インストール・タイプ, 3-2
  - ソフトウェアのインストール, 3-1
  - ソフトウェア要件, 2-2
  - トラブルシューティング, B-1
  - ハードウェア要件, 2-2
- Oracle Database Examples
  - インストール, 3-7
  - 概要, 1-3
  - 必須製品, 1-3
- Oracle HTML DB
  - HTML DB イメージ・ディレクトリの別名, B-3
  - Oracle HTTP Server 要件, 2-7
  - Oracle9i データベースへの接続, 4-15
  - Oracle9i 用の構成, 4-14
  - Oracle データベースからの削除, 3-16
  - XML DB 要件, 2-8
    - インストール概要, 1-6
    - インストール後のタスク, 4-13
    - インストール先, 1-8
    - インストールの検証, 4-13
    - 概要, 1-8
  - 既存の Oracle HTTP Server ホームへのインストール, 3-12
  - 新規 Oracle HTTP Server ホームへのインストール, 3-9
    - データベース要件, 2-7
    - 必要なディスク領域, 2-7
    - 要件, 2-7
    - ログイン, 4-13
- Oracle HTTP Server
  - FAT 32 システムのハードウェア要件, 2-6
  - httpd.conf ファイル内のポート番号の変更, 4-5
  - HTTP リクエストへの対応 (データベース・アクセス記述子), 4-15
  - LoadModule ディレクティブ, 4-4
  - Oracle HTML DB のインストール, 3-9
  - Oracle Process Manager and Notification サービス, 4-12
  - Oracle9i, 4-14
    - 以前のリリースからの移行, 4-2
    - インストール概要, 1-6
    - インストール後, 4-2
    - インストール先, 1-7
    - インストールの検証, 4-12
    - 概要, 1-6
    - 起動, 4-12
      - 高可用性機能, 有効化, 4-12
      - サーバー証明書と秘密鍵の移行, 4-7
      - サポートされない機能に関する構成情報の削除, 4-4
    - 新規 Oracle ホームでの要件, 2-5
    - 新規 Oracle ホームへのインストール, 3-9
    - シングル・サインオンの有効化, 1-6
    - 停止, 4-12
    - データベース・アクセス記述子, 4-15
    - ハードウェア要件, 2-6
    - ファイルのバックアップ, 4-2
    - 他のリリースとの相違, 1-7
  - Oracle HTTP Server の起動, 4-12
  - Oracle HTTP Server の停止, 4-12
  - Oracle Process Manager and Notification サービス, 4-12
  - Oracle SQLJ Runtime, 1-4
  - Oracle SQLJ Translator, 1-4
  - Oracle Text のナレッジ・ベース
    - インストール, 3-7
    - 概要, 1-5
  - Oracle Universal Installer, 3-1
    - インベントリ, B-2
    - 異なる言語で実行, A-7
    - 異なる言語でのコンポーネントの実行, A-8
    - 使用するバージョン, 3-2

ソフトウェアの削除, 3-15  
非対話型モードでの実行, A-2  
ログ・ファイル, B-2  
ORACLE\_HOME 環境変数  
Companion CD インストールのための削除, 3-9,  
3-12  
Oracle Products インストールのための削除, 3-7  
以前の HTTP Server の移行, 4-11  
Oracle9i データベース, Oracle HTTP Server 用の  
Oracle HTML DB の構成, 4-14  
Oracle インベントリ・ログ・ファイル, B-2  
Oracle データベース  
Oracle HTML DB の削除, 3-16  
Oracle ホーム, 新規  
HTTP Server のインストール, 3-9  
Oracle Database 10g Companion Products, 3-9  
Oracle ホーム・ディレクトリ  
指定, 2-4  
マルチホーム, 2-9

## P

---

PATH 環境変数, 4-11  
PERL5LIB 環境変数, 4-6

## T

---

Telnet サービスのサポート, 2-2

## W

---

Windows Telnet サービスのサポート, 2-2  
Windows Terminal Server  
サポートされないコンポーネント, 2-3  
Windows XP のサポート, 2-3  
Windows ターミナル サービスのクライアント, 2-3

## X

---

XML DB 要件, Oracle HTML DB, 2-8

## あ

---

アダプタ, ループバック, 「ループバック・アダプタ」、  
「ネットワーク・アダプタ」を参照

## い

---

移行

httpd.conf ファイル, 4-3  
以前の Oracle HTTP Server から, 4-2  
イメージ, Oracle HTML DB, B-3  
インストール  
CD-ROM ドライブ, 3-4  
DVD ドライブ, 3-4  
Oracle Database 10g Products, 3-7  
Oracle Internet Directory, vii  
概要, 3-2  
既存の Oracle HTTP Server ホームへの Oracle  
HTML DB のインストール, 3-12  
失敗, B-2  
新規 Oracle ホームへの Oracle Database 10g  
Companion Products のインストール, 3-9  
ソフトウェア, 3-1  
タイプ, 3-2  
バックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC),  
3-7, 3-9  
非対話型モード, A-2  
複数, 3-2  
プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC),  
3-7, 3-9  
リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリ  
モート・インストール, 3-6  
リモート・インストール, CD-ROM ドライブ, 3-4  
リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-4  
インストール後のタスク  
Oracle HTML DB, 4-13  
Oracle HTTP Server, 4-2  
インストール・タイプ  
Oracle Database 10g Companion Products, 1-6  
Oracle Database 10g Products, 1-2  
インベントリ・ディレクトリ, B-2

## お

---

オラクル製品 主なシステム要件  
認定情報, 2-2

## か

---

### 環境変数

#### ORACLE\_HOME

Companion CD インストールのための削除,  
3-9, 3-12

Oracle Products インストールのための削除, 3-7  
以前の HTTP Server の移行, 4-11

#### PATH, 4-11

#### PERL5LIB, 4-6

関連ドキュメント, vii

## け

---

### 言語

異なる言語での Oracle コンポーネントのインス  
トール, A-7

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, A-8

## こ

---

### コンポーネント

異なる言語で使用, A-8

## さ

---

サイレント・インストール, 「非対話型のインストー  
ル」を参照

### 削除

Oracle Database からの Oracle HTML DB の削除,  
3-16

Oracle ソフトウェア, 3-15  
ソフトウェア, 3-15

サポートされないコンポーネント

Windows Terminal Server, 2-3

## し

---

新規 Oracle ホーム, Oracle HTTP Server の要件, 2-5

## た

---

ターミナル サービスのクライアント, 2-3

ターミナル サービスのサポート, 2-3

## て

---

### データベース・アクセス記述子

Oracle HTML DB インストール中の作成, 3-11

移行, 4-11

概要, 4-15

### データベース要件

Oracle Database 10g Products, 2-4

Oracle HTML DB, 2-7

## と

---

### ドキュメント

以前のリリースからの移行およびアップグレード,  
vii

インストール, 3-7

管理およびチューニング, vii

関連, vii

レスポンス・ファイル使用時, A-6

### トラブルシューティング, B-1

HTML DB イメージ・ディレクトリの別名, B-3

Oracle HTML DB イメージ, B-3

インストール失敗後のクリーン・アップ, B-2

インベントリ・ログ・ファイル, B-2

ログ・ファイル, 確認, B-2

## ね

---

### ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ

インストール, 3-7

概要, 1-5

### ネットワーク・アダプタ

複数の別名を持つコンピュータ, 2-10

プライマリ, 複数の別名を持つコンピュータ上,  
2-10

プライマリ, マルチホーム・コンピュータ上, 2-9

プライマリ・アダプタの確認方法, 2-10

「ループバック・アダプタ」、「プライマリ・ネット  
ワーク・アダプタ」も参照

ネットワーク・カード, 複数, 2-9

ネットワーク関連, 2-8 ~ 2-21

DHCP コンピュータ, 2-8

概要, 2-8

ハード・ドライブからのインストール, 3-3

複数のネットワーク・カード, 2-9

複数の別名を持つコンピュータ, 2-10

ループバック・アダプタ, 2-10 ~ 2-21

## は

---

ハードウェア要件

Oracle HTML DB, 2-7

Oracle HTTP Server, 2-6

ハード・ドライブからのインストール, 3-3

バックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC), 3-7, 3-9

## ひ

---

非対話型のインストール

概要, A-2

「記録」モード, A-4

手順, A-2 ~ A-6

「レスポンス・ファイル」も参照

必要なディスク領域

Oracle Database 10g Products, 2-4

Oracle HTML DB, 2-7

「標準」インストール・タイプ

非対話型のインストール, A-4

## ふ

---

ファイル, Oracle Universal Installer ログ・ファイル, B-2

複数の別名, コンピュータ, 2-10

複数の別名を持つコンピュータ, 2-10

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC), 3-7, 3-9

プライマリ・ネットワーク・アダプタ

確認方法, 2-10

「ループバック・アダプタ」、「ネットワーク・アダプタ」も参照

## へ

---

別名, コンピュータ上の複数の, 2-10

## ま

---

マルチホーム・コンピュータ, インストール, 2-9

## よ

---

要件

NTFS システムの Oracle HTML DB, 2-6

Oracle Database 10g Companion Products, 2-5

Oracle Database 10g Products, 2-3

Oracle HTML DB, 2-7

Oracle HTML DB, Oracle HTTP Server の要件, 2-7

Oracle HTML DB, Oracle XML の要件, 2-8

Oracle HTML DB のディスク領域, 2-7

Oracle HTTP Server のハードウェア, 2-6

新規 Oracle ホームでの Oracle HTTP Server, 2-5  
要件, ハードウェアおよびソフトウェア, 2-2

## り

---

リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-6

リモート・インストール, 3-6

リモート・インストール, CD-ROM または DVD ドライブ, 3-4

## る

---

ループバック・アダプタ

Windows 2000 からの削除, 2-21

Windows 2000 でのインストール, 2-15

Windows 2003 からの削除, 2-21

Windows 2003 でのインストール, 2-19

Windows NT からの削除, 2-21

Windows NT でのインストール, 2-12

Windows XP からの削除, 2-21

Windows XP でのインストール, 2-19

インストール, 2-10, 2-21

インストールされているかの確認, 2-11

概要, 2-10

必要なとき, 2-10

複数の別名を持つコンピュータ, 2-10

「ネットワーク・アダプタ」、「プライマリ・ネットワーク・アダプタ」も参照

## れ

---

レスポンス・ファイル

companionCD.db.rsp, A-3

companionCD.midtier.rsp, A-3

インストール中の指定, A-5, A-6

カスタマイズ, A-3

作成, A-4

サンプル, A-3

使用, A-2

ドキュメント, A-6

変更, A-6

メディア, A-2

「非対話型のインストール」も参照

## ろ

---

ログ・ファイル

Oracle Universal Installer, B-2

確認, B-2